

古代ギリシアにおける 教養・教育の理念に関する研究 (5) — W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ —

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (5): Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

HATA Jun

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の経緯について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886~1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とし、下記の紀要に発表したものに継続している。

- (1) 都留文科大学大学院紀要第15集 (2011年3月)
- (2) 都留文科大学大学院紀要第19集 (2015年3月)
- (3) 都留文科大学研究紀要第83集 (2016年3月)
- (4) 都留文科大学大学院紀要第20集 (2016年3月)

*小論の<注記と考察>などで上記拙論に言及するときは、本継続研究 (1)、(2)、(3)、(4) というように記す。

2. 小論の対象と構成について

小論は、『パイデア』第Ⅲ巻 (第4編) の「1 Greek Medicine as Paideia パイデア—としてのギリシアの医術」の前半を対象とする。イェーガーの、この主題についての研究は拡充していったようで、英訳版第Ⅱ巻 (英訳版第3編) の「序文」で、「私のギリシア医学に関する章のための予備的研究はこの本の限界を超えて大きくなり、独立した著作として出版された (<Diokles von Karystos>)。」と記している (本継続研究 (3) の<訳文④>を参照のこと)。なおこの章は、ドイツ語版ではその第3編の「4世紀」の次に配されている。

小論では、小論としての独自の章を設定して (前半として1章から6章まで) 訳出し、その章ごとに、<注記と考察>として私の注記的なものと簡略な考察事項を付す。<全体の考察>は、この「パイデア—としての医術」の後半の訳出のあとに置くこととする。

訳文の章の区切りは私の判断によるもので、その章名も私が便宜的に付したものである。段落の設定などは、ドイツ語版と英訳版との間に若干の違いがあり、小論では英訳版に準じた。

「NOTES」(「ANMERKUNGEN」)は、《原文注記》として小論の末尾に記す。

3. テキストと論述の仕方

イ) テキストは第Ⅲ巻(1944年版)を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは1944年版のものである。

参照するドイツ語版は、一卷にまとめられた復刻版(1989年、初版は1973年)を用いている。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し(格変化などは原文中のまま扱った)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。文章中の参照事項の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

ハ) カッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。本文のイタリック体は、そのままイタリック体で示すこととする。

ニ) <注記と考察>における人名等の確認は、小川政恭訳『ヒポクラテス 古い医術について 他八編』(岩波文庫、1963年)、『哲学事典』(平凡社、1971年)、『プラトン全集 別巻』(岩波書店、1978年)、伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』(東京大学出版会、1982年)、大槻真一郎翻訳・編集責任『ヒポクラテス全集1～3』(エンタプライズ、1985年、1987年、1988年)、古川春風編著『ギリシャ語辞典』(大学書林、1989年)、『岩波 哲学・思想事典』(1998年)、國原吉之助著『古典ラテン語辞典』(大学書林、2005年)、松原國師『西洋古典学事典』(京都大学学術出版会、2010年)、その他、を参照している。

その中でも松原の大著『西洋古典学事典』は、どの項目も充実した内容を持ち、イエーガーの著作を理解する上で格別の助けとなっている。それで小論の<注記と考察>における松原著の活用は、単に(松原著)と記して示す。また上記大槻真一郎翻訳・編集責任『ヒポクラテス全集1～3』の訳は、これはギリシア語からの訳業であり格別の意義をもっているように思われるが、⁽¹⁾小論の「パイデアーとしてのギリシアの医術」を読む上でも不可欠であり、小論ではこれを単に『ヒポクラテス全集』と記す。

なお<注記と考察>における本文中の人名等の確認記述は、本継続研究では重複を避けることを基本とするが、イエーガーの論述は古代社会についての素養を前提にして書かれているので、それぞれの部分の論述を理解するために重複する注記も記した。その場合は、可能な範囲で関連する注記の箇所を示すようにした。

<注記と考察>

(1) いわゆる「ヒポクラテス全集」についてイエーガーは、「ヒポクラテスの、彼の時代に本屋で売られたような‘全集’ではなく、前3世紀のアレクサンドリアの学者たちによってコース島の医術学派の文書館の中に見出された、古い医術の著作の全収

集物なのであり、その学者たちは、後世の人びとのためにヒポクラテースの著作を（他の古典的作家たちのものと同じように）保存しようとしてたのであった」と指摘している（小論第Ⅱ章3節）。『ヒポクラテース全集1～3』というギリシア語からの全訳は、このような紀元前の学者たちの意思を、2000年以上のときを経て、はるか東の国の日本の学者・研究者集団がしっかりと受け止めたという歴史的なことである。なおヒポクラテース全集の和訳史とヒポクラテースの現代的なインパクトについては、大槻の「序」（『ヒポクラテース全集 第1巻』）を参照のこと。

4. 訂正について

イ) <注記と考察>で、原典確認が必要と判断するときに「ローブクラシカルライブラリー」（Loeb Classical Library）を用いている。本継続研究（2）の18 p、（4）の34 pで、それを「ロエブクラシカルライブラリー」と誤記したので、ここで訂正する。

ロ) 本継続研究（3）の113 pの13行目に文字の脱落があるとの指摘を受けた。感謝し、次のように訂正する。

（誤）Bildungsproze→（正）Bildungsprozeß

ハ) 本継続研究そのものではないが、その一環に位置し、本継続研究の<注記と考察>で引くことのある小論「想起に関する研究—社会教育（自己教育・相互教育）の原理をたずねて—」（都留文科大学大学院紀要第7集、2003年3月、所収）に複数の誤記があり、ここで訂正しておく。なおドイツ語の誤記はご指摘を受けたものであり、感謝する。

・94 pの下から7行目

（誤）「民俗差別」→（正）「民族差別」

・98 pの22行目

（誤）「観察方」→（正）「観察法」

・100 pの8行目

（誤）seinen→（正）seien

・100 pの11行目

（誤）ενθυμεμαι→（正）ενθυμεομαι

・106 pの下から11行目

（誤）「青年（子どもの）」→（正）「青年（子ども）」

・108 pの下から6行目

（誤）「απλοτης Α Προ Τε ρ σ (simple)」→（正）「ἀπλοτης Α Προ Τε ρ σ (simple)」

Ⅱ. 「パイデアーとしてのギリシアの医術」（英訳版第4編の1 Greek Medicine as Paideia）

パイデアーとしてのギリシアの医術（その1）

英訳版第Ⅲ巻、1944年版：3 p～15 p

1. ギリシアの医術とパイダイアー

<訳文> 3 p~ 4 p

プラトーンが医者と医術 (doctors and medicine, den Arzt und seine Kunst)⁽¹⁾のことを非常に褒めているので、たとえギリシアの早期の医術に関する文献 (medical literature, medizinischen Literatur) が完全に失われているとしても、われわれは、キリスト教以前の5世紀末、4世紀の間、ギリシアの医術の専門職 (medical profession, des ärztlichen Standes 医者 の地位) の社会的、知的威信が本当に高いものであったということを推論するのにさらなる証拠は必要がないだろう。プラトーンは、医者のことを、知の高度に専門化され (specialized) 洗練された分野の代表者と考えており、そしてまた専門職の掟 (a professionalcode, eines Berufsethos 職業倫理) を、それは実践行為における知と目的との間の適切な関係の完全なモデルとして十分に厳格なものであり、また彼はそれを、理論的な知が如何に人間生活の構造を変容させるのを助けるかを自分の読者に理解させるためにしばしば引いているのだが、その具体化とも考えている。ソークラテースの倫理的な知の考え方は、そのことにプラトーンの対話篇における非常に多くの論議は論理的に帰結するのだが、あのモデル、つまり彼が非常にしばしば言及する医学 (medical science, Medizin)、抜きには考えられないだろうということは少しも誇張ではない。当時存在した人間の知のあらゆる分野 (数学や自然科学を含む) のうちで、医術はもっとも密接にソークラテースの倫理的な科学に近親性がある。<1>しかしながら、われわれはギリシアの医術を、単にソークラテース、プラトーン、そしてアリストテレスの哲学に通じる知的な発展の予備的な段階としてだけではなく、それが単なる技術以上の何ものかへと、つまりギリシアの人びとの生活のなかのある主導的な教養力 (a leading cultural force, einer führenden Kuturmacht) へと成長したのは、当時それが保持していた形式において (in the form which it then possessed, in ihrer damaligen Form) であるという理由ゆえに、吟味しなければならない。あの時代より、多少の反対者がいるにしても、医術はますます一般教養の (general culture, allgemeinen Bildung) (ἐγκύκλιος παιδεία 一般教養)⁽²⁾の構成要素となっていった。それは、われわれの時代の教養 (culture, Kultur) において、あの威信を取り戻してはいない。今日の高度に発展した医学 (medical science) は、それは人文主義の (humanistic, des Humanismus) 時代にグレコローマンの (of Greco-Roman, des klassischen Altertums 古典古代の) 医療文献を再発見することから生じたのであるが、余りにも厳格に専門化されており<2>、その先祖と同じ位置をもつことができなくなっている。

医学の、後期グレコローマンの教養への完全な受容は、ギリシア人の見地からはガレーノス⁽³⁾に、またローマ人の見地からはカトー⁽⁴⁾、ウァッロー⁽⁵⁾、ケルスス⁽⁶⁾の、彼らの一人も医者<3>ではなかったのだが、その彼らの 'encyclopaedias (百科全書)⁽⁷⁾に、もっともよく見ることができる。しかしそのことは、それが (前) 5世紀後半とそれ以降に勝ち得た偉大な影響と威信の承認でしかない。それがあのような地位を保持したのにはいくつかの理由があった。第一は、あの時代に、それが何世紀も維持したような高い知的な水準へとそれを高めるほどの広い普遍的な視野をもつ人びとによって、それが初めて主張されたということである。第二は、それが、哲学と衝突することによって、豊かになったということであって、それは自身の目的と方法の明瞭な理解に到達し、それ自身の特有な知の

概念の古典的な表現を作り出したのである。同様に重要なことであるが、ギリシア的教養（culture, Kultur）はいつも、精神（the soul）ばかりではなく身体（the body）の教養（the culture, Formung 形成）でもあり続けていた、という決定的な事実があった。その実態は、早期のギリシア人の教育（education, Bildung）を作っている二元的な制度に体现されていた—つまり体育（gymnastics, Gymnastik）と‘music’（Musik）⁽⁸⁾である。新しい時代の一つの兆候は、身体的訓練のどの叙述でも医者が体育指導者（trainer）_{<4>}と同時に述べられていることである—ちょうど、精神的な領域において、哲学者が音楽家や詩人と並んで現れているのと同じように。古典期ギリシアにおける医者の独特の位置は、主としてそのパイデアー（paideia）との関連に起因している。われわれは体育教育（gymnastic education, die Gymnastik 体育）をホメーロスから、その理念に形と色合いが与えられている詩歌を通してであるが、プラトーンまで、彼においてその理念は人間存在の（of human life, des menschlichen Daseins）成り立ちにおける自らの位置を勝ち得ることになるが、その発展を通して追ってきている。体育とは異なり、医術は非常に早くそれ自身の文献を生み出して、それはわれわれにその真の本質を示しているし、また、その世界的な影響の真の理由となっている。それに依ってわれわれは、—ホメーロス_{<5>}は医者の技術を‘多くの他の者の価値に匹敵する’⁽⁹⁾—と賞賛しているけれども—医学（medical science）自体は実際には理性の時代によって生み出されたのだ、ということを知る。

<注記と考察>

- (1) 小論の訳では、「医術」と「医学」に格別な使い分けはない。
- (2) ἔγκυκλιος エンキュクリオス：丸い、通常の、一般的な、全般的な。ἐγκύκλιος παιδεία：一般教養。
- (3) ガレーノス：後129年頃～199/216年頃。ローマ帝政期のギリシアの医学者で哲学者。「ヒッポクラテース以来のギリシア医学の完成者」とされる。ローマ皇帝マルクス・アウレリウスらの求めにより宮廷医ともなっている。彼のほとんどの著作が「その後アラビア語に訳されてイスラーム医学の発展に著しく貢献し、さらにのちアラビア語からラテン語に重訳され、実に1500年間にわたり圧倒的な影響力を西方世界において保った」という。（松原著）
- (4) カトー（大カトー）：前234年～前149年。ローマ共和政期の政治家、弁論家。失われた散文『息子への訓言』は、「ローマ最初の百科全書と呼べる」という。（松原著）
- (5) ウァッロー：前116年～前27年。共和制末期のローマの学者・著述家。「最も博学な人」と称せられ、78歳までに490巻もの書物を刊行（生涯に75作品、617巻といわれる）、文学・言語学・歴史・考古学・地理・医学・数学・音楽・哲学・修辞学・法学等々、ほぼあらゆる分野に盛名を馳せ、90歳近い長命を保った…。百科全書的な大学者だった…』という。（松原著）
- (6) ケルスス：前30/25年頃～後45/50年頃。ローマの著述家。「ティベリウス帝の治世（14～37）に、農業・戦術・弁論術・法律・哲学・医学などに関する一種の百科全書 Artes をラテン語で執筆したが、そのうち医学を扱う8巻（第6～13巻。De Medicina）のみが伝存する。これはヒッポクラテース以来600年にわたるギリシア医学の知識を現代

に伝える重要な著述であり、性病や精神病、各種外科手術（整形外科、白内障手術、膀胱結石の切石術、扁桃腺手術、手術の縫い合わせの糸、他）についての言及もあって、ヘレニズム時代アレクサンドレイア医学の水準の高さをうかがわせる好資料となっている。」という。(松原著)

- (7) encyclopaedias (encyclopedia) は ἐγκύκλιος παιδεία (一般教養) に由来する。ここでは、「百科全書的な著作」(den ‚enzyklopädischen‘ Werken) の意味あい。
- (8) 英語で一般に music と訳される古代ギリシア語は μουσική (ムーシケー) で、「音楽」だけではなく、「詩歌、音楽、学芸」の意味を合わせもつ。形容詞 μουσικός (ムーシコス) は、「音楽の、詩歌に勝れた、学芸に通じた、教養のある、調和のとれた」などの意味をもつ。
- (9) イェーガーが原文注記<5>で指示している『イーリアス』の箇所(第11歌514)は次のとおり(松平千秋訳『イーリアス』岩波文庫、上、355 p)。
- 「…医者というものは、矢を抜いたり、痛みを癒す薬を塗るなど、他の者幾人にも値するものですからな。」

2. イオーニアー地方の自然哲学と医術—「自然」理解の展開

<訳文> 4 p~ 8 p

医学(it, die Medizin)がギリシア文明(civilization, Kultur)の歴史のなかで初めて現れるとき、それは、それが与えるもの以上のものを受け取る。その従属的な位置のきわめて明瞭な証拠は次のようなことである。つまり、完全な形で存在する5世紀と4世紀のすべての医術に関する文献はイオーニアー方言⁽¹⁾の散文で書かれている。それらのいくつかは、おそらくイオーニアーで書かれたが、しかしそのことは、どうしても全体の状況を説明するものではない。ヒポクラテース⁽²⁾自身はコース島⁽³⁾に住み、教えたが、その住人はドーリス方言⁽⁴⁾を話した。彼と彼の学派がイオーニアー方言を書き、おそらくそれを科学的論議で話しもしたという事実は、すぐれたイオーニアーの文明(civilization, Kultur)と科学の影響によってしか説明され得ない。そこにはいつも医者たちがいたのであるが、しかしギリシアの治療の技能は、それがイオーニアー地方の自然哲学の影響を受けるまでは、その目的に自信をもつ組織的な(methodical)科学へと発展することはなかった。ヒポクラテース学派の露骨な反哲学的態度によってこの事実を曖昧にしないことが本質的であって、その学派の仕事において、われわれは初めてギリシア医術に出会うのである。<6>もしそれが、あらゆる事象の‘natural’な説明を探索する、また、すべての結果をその原因まで追究して原因と結果のすべての連鎖がどのように必然的な宇宙の秩序を形成しているかを示そうと努力する、さらにまた、世界のあらゆる秘密は事物の偏見のない観察と理性の力によって見抜くことができるという固い信念をもつ、そのようなごく初期のイオーニアー地方の自然哲学者たちがもしいなかったら、医術は決して科学にはならなかったであろう。われわれは、キリストよりも2千年以上も前のファラオの医者たちによって記された記録を読むことができるし、その彼らの観察のおどろくべき正確さと微細さを賞賛することができる。彼らはすでに原因の概念と普遍的に適用できる理論を産み出すことになり向かっていたのである。<7>そのような高い発展段階に到達していたことを鑑みると、なぜエジプトの医術は、われわれが使うことばの意味における科学にならなかったのかを

問わずにはいられない。その医者たちは、専門化や経験主義的な観察といったことを知ることにはほとんどなかったのである。しかし答えは簡単である。エジプト人は、イオーニア人たちができてそうしたようには、自然 (nature, der Natur) を宇宙の全体 (a universal whole) だと考えることができなかったのである。⁽⁵⁾ 彼らは (われわれが今知っているように)、ピンドロス⁽⁶⁾ の古風なギリシア世界でまだ医術として通用していた魔術や呪文の力を克服するのに十分に賢明で十分に現実主義的であった。しかし、実際の科学的運動を支えることができる理論的な学説を創造し得たのは、ギリシアの医術だけであったのであり、それはその哲学的な先駆者たちから普遍的な法則 (universal laws) の探究法を学んでいたのであった。

ソロン⁽⁷⁾ のときにはもう (彼はイオーニアに深く影響を受けている)、われわれは、病気を支配している法則、それに部分と全体との、あるいは原因と結果との分かちがたい関係、へのまったく客観的な洞察を見いだす。そのように明瞭で透徹した見方は、その当時はイオーニア以外では不可能だった。ソロンはそのような普遍的な法則の存在を当然のことと考えており、彼の、政治的危機は社会の有機的組織体 (social organism, der sozialen Gemeinschaft 社会的な共同体) の健康の狂いであるという 'organic' (有機体的) な見解は、その前提に基づいている。<8>別の詩歌では、彼は人間の人生を7年間に分割しているが、それはお互いに律動的な規則性 (pattern, Regelmäßigkeit) をとりながら続いていく。それは (前) 6世紀に書かれているが、はるかに後の、<7の数に関する On hebdomads>論文やその他の 'Hippocratic' (ヒポクラテースの) 著作に極めて共通しているのであって、というのは、それと同様に、それらはみな現象を支配する法則を、数の関係における類似点に帰する傾向をもっていたのである—ソロンと同時代の、ミレートス⁽⁸⁾ のアナクシマンドロス⁽⁹⁾ によって、その宇宙論においてなされたように、またその後にはイオーニアのピュータゴラス⁽¹⁰⁾ とその学派によってなされたように。<9>すべての年齢はそれ自身の力に 'suitable' (ふさわしい) 何ものかがある、という考えはソロンにも現れており、そして後には、食餌療法という医術理論の基礎として再現する。<10>自然哲学によって作り出された理論はほかにもあり、すべての自然現象はお互いに事物によって支払われる一種の法的な賠償 (legal compensation, Rechtsausgleiches) のようなものだ、というものもある。これはしばしば医術の著述家に現れるが、彼は生理学的、また病理学的事象を賠償 (compensation, des Schadenersatz 損害賠償) ないし報い (retributions, der Vergeltung) として説明する。<11>これに非常に類似した考えは、有機体の、あるいはすべての自然の、正常で健康な状態は <isomoiria> (イソモイリア)⁽¹¹⁾ 一つまりその全基礎的要素の同等性 (equivalence)、ということにある、というものである。これは、たとえば、ある医学者 (a medical scientist) によって書かれた *On airs, waters, and places* (「空気、水、場所について」) や、他のさまざまな関連のある文脈で現れている。<11a>ギリシア医術において他の基本的な考え—たとえば、混合 (mixture, der Mischung) (κρᾶσις 混合) とか調和といったもの—が、自然哲学に由来するものであったか、あるいは自然哲学によって医術理論から借りられたものであったかははっきりしない。

しかし、自然 (Nature) (φύσις 自然) という支配的な (dominating, allbeherrschend) 概念の起源についてはまったく疑いがない。ソフィストたちや彼らの教育理論を論じると

き、われわれは、人間の (human) *physis* (Physis 自然)⁽¹²⁾ が教育過程全体の基礎なのだという考えの画期的な重要性のことに言及してきた。<12>われわれはトゥーキュディデースに、歴史に適用された同じ考えを見いだしたのであり、つまりわれわれは彼の歴史的な思考がどのように、いつもどこでも同じ ‘human nature (menschlichen Natur)’ (人間性)⁽¹³⁾ のようなものが在るという仮定に基づいているのかを見た。⁽¹⁴⁾<13>この点で、他の多くの点と同様に、ソフィストたちとトゥーキュディデースは共に当時の医術に影響を受けていたのであるが、その医術は human nature (der Natur des Menschen) (φύσις τοῦ ἀνθρώπου) という考えを発見していたのであり、またその仕事のすべてがその考えに基づいていたのである。しかしその点で医術自身は、偉大な自然 (the great physis)、つまり万物の自然 (the Nature of the universe) (φύσις τοῦ παντός)⁽¹⁵⁾ という概念に基づいていたのであり、それはイオーニアアの哲学によって発展させられた考えだったのである。論文 *On airs, waters, places* (「空気、水、場所について」) の導入部は、ヒポクラテースの医術思想の、自然を全体として観察する哲学的見地に依拠する仕方の、その見事な表現となっている。‘医術 (medicine) を正しく学ぶことを望む者はだれでも次のようにしなければならない。第一に彼は、一年の各季節の影響をよくよく観察しなければならない—というのは、それぞれの季節は少しも似ていなくて、それら自身においても、それらの変わり目においても、お互いに非常に異なっているのである。それから彼は、暖かい風、そして寒い風を、概してすべての人間に影響を及ぼす風を、それからある地域 (region) に固有な風を、検討しなければならない。彼はまた、異なる水の影響も考量しなければならないのであって、—というのは、ちょうどそれらが味や重さにおいて異なるのと同じように、それだけそれらの影響は大いに異なるのである。医者には知らない都市に到着したときはいつでも’ (ここで、そういうときはいつでも、彼は巡回する医師と考えられている) ‘彼はまず、そこが様々な風と日の出との関係でどういうふうに位置づいているかを見るためにその場所を調査しなければならない。…またどんな水をもっているかを…またその土地の性質を…。もし彼が、その気象が季節とともにどんなふうに変化するか、またいつ星が昇り、沈むか、を知れば…彼は一年がどんなものになるかを予測できるであろう…。もしだれかが、このことがあまりにも自然科学的過ぎると考えるならば、彼は、考え直した結果、天文学は医術にとって実に大きな助けになるということをきっと理解するだろう。—というのは、人間の病気は季節とともに変化するのである。⁽¹⁶⁾ 病気の問題にこんなふうに対する人は、明らかに非常にすぐれた心を持っていたのだ。われわれはそのことを主として、彼の事物の全体を解する心 (his sense of the wholeness of things, der Sinn für das Ganze) に見る。彼は病気を孤立させることも、それをそれ自体、特殊な問題として考察することもない。⁽¹⁷⁾ 彼は、病気をもつ人間を確かな判断力で看取り、そしてその病人を、普遍的な法則と独自の特殊な性質とをもつ、彼をとりまくあらゆる自然的環境の中において見る。ミーレートス学派⁽¹⁸⁾ の自然哲学の精神は、評論 *On the divine disease* (i.e. epilepsy 癲癇) の忘れがたい言葉に、まったく同じように明瞭な表明を見いだす。⁽¹⁹⁾ その著者は、この病気は神聖さ (divine, göttlich) において他の病気と変わるものではなく、他のものとまったく同様の自然的な原因によって生じる、—と言う。要するにそれらはみな神聖であり、またみな人間的だと言うのである。<13a>自然 (physis, der Physis) の概念は、前ソークラテース的哲学の非常に多くがそれに基づいてきていたのであるが、人間の身体

的自然（the physical nature of man, der körperlichen Natur des Menschen）という医術理論にもっともうまく応用され、拡張されたのであり—その理論が、その後の、その概念の人間の精神的な自然（man's spiritual nature, die geistige Natur des Menschen）へのすべての応用にとっての原型（the pattern, wegweisend 指針となる）になっていったのである。

5世紀の間に、自然哲学と医術との間の関係は変わり始めた。医術的な、とりわけ生理学的分野における発見は、アナクサゴラス⁽²⁰⁾やアッポローニアのディオゲネス⁽²¹⁾といった哲学者たちによって受け継がれ、それに、たとえばアルクマイオン⁽²²⁾、エンペドクレース⁽²³⁾、それにヒッポーン⁽²⁴⁾のような、自らは医者である哲学者たちも現れており、この三人はみな、西方ギリシアの学派に属していた。同時に、この関心の混交は、今度は彼ら医学者たち（medical scientists, die Mediziner 医師たち）に影響を与え、そして哲学者たちによって作り出された学説のいくつかを、自分たち自身の理論の根拠として取り入れ始めたのであり、われわれはすでに、ヒッポクラテースの諸論文のいくつかにこのことを観察してきた。このように、二つの非常に異なる種類の思想の間の、最初の実り多い接触のあと、それらが相互の領域に浸透する不安定な時代が続き、したがって医術と哲学との間のすべての境界線が溶解する恐れがあった。初期の、今なお残っているギリシア医術の文献が始まるのは、その時代—医術の独立した存在にとって危険な（critical, bedrohlichen 危険をはらんだ）時代—のことである。⁽²⁵⁾

<注記と考察>

- (1) イオーニア：小アジア西岸のエーゲ海に臨む地方で、「前800年頃までには各地にイオーニア人を主体とする都市国家 polis がいくつも形成され、交通の要衝として繁栄。とりわけオリエント先進文明の影響を強く受け、天文学・哲学・文学・歴史・芸術がギリシア本土に先立って栄えた。大詩人ホメロスの叙事詩や、タレス以下の自然哲学（イオーニア学派）が生まれ、後の古典期ギリシア文明形成に甚大な影響を与えた。」とされる。（松原著）
- (2) ヒッポクラテース：前460年頃～前375年頃。ギリシアの医学者で、「医学の父」「科学的医学の祖」と呼ばれる。「イオーニア方言で著された多くの論述が彼に帰せられ、『ヒッポクラテース集典』全170篇の名で伝存してはいるものの、それらは前3世紀初頭にアレクサンドレイアで諸家の稿本を雑然と編纂してできた医学集成でしかなく、どれがヒッポクラテース本人の真作であるかという問題に関しては定説を見ない。」とされる。（松原著）
- (3) コース島：小アジア西南部カーリアの沖合、スポラデス諸島に属する島。「『医学の祖』ヒッポクラテースをはじめ、画家アペッレスや詩人ピリータース、プトレマイオス2世らの出身地」で、「前5世紀末にヒッポクラテースの開いた医学派（コース学派）は、クニドス学派と並んで評判高く、アスクレーピオスの子孫を称する歴代の名医を輩出」したとされる。（松原著）
- (4) ドーリス人：古代ギリシア民族の一派で、彼らがペロポネネソス半島を占領したころ（伝承では前1104年）には、「中部ギリシアのドーリス地方のみならず、アルゴス、スパルター、メッセネー、シキュオン、コリントスなどペロポネネソスの大半を占領、次いで海上に進出してクレター島をはじめテーラー、メーロスなどエーゲ海

の島々、さらには小アジア西岸（ヘキサポリス）、ロドス島、パンピューリアー地方へ拡大。その植民範囲は西方のシケリアー島と南イタリアに、南方では北アフリカのキューレーネーに及んだ。」という。また「その文化はアルカイック期に建築・陶芸・彫刻・合唱抒情詩に独特の発展を見せ、とりわけ荘重で男性的なドーリス式建築様式は、イオーニアー式・コリント式と並んで名高い。」とされる。さらにまた「古典的にはアテーナイを中心とする大族イオーニアー人との対立が激化し、ペロポネネーソス戦争を経てヘレニズム時代に至るまで両族間の抗争が続いた。」とされる。（松原著）

- (5)「自然を宇宙の全体だと考えること」と訳した箇所は、ドイツ語版では単に einer philosophischen Betrachtung der Natur（自然の哲学的考察）となっている。

なおイェーガーは、パイデアー研究として、プラトーンの対話篇『ティマイオス—自然について—』の重要性を示唆している（本継続研究（3）の〈訳文④〉）。

- (6) ピンダロス：前522/518年～前442/438年。古代ギリシア最大の抒情詩人とされ、「弱冠20歳にしてすでに合唱抒情詩人として名声を馳せ、以来80歳の高齢で没するまで、全ギリシア世界の王侯貴族の恩顧を蒙り、彼らの賓客となり多数の頌詩を寄せた。」という。彼の「祝勝歌はオリュンピア、ピューティア、イストミア、ネメア4大祭典競技で優勝した若者を称えたもので、これらはローマ帝政期からビザンティン時代にかけて学校の教科書として用いられたおかげで、例外的にほぼ完全に保存されたのである。なかでも「オリュンピア祝勝歌」と「ピューティア祝勝歌」が優れており、荘重雄大かつ華麗な文体で歌われ、詩風は貴族的で力強く、時に晦渋、韻律も複雑を極めている。ドーリス風の抒情詩を極度に発展させたピンダロスは、後世に至るまで高く評価され、ギリシア・ローマにあって単に「詩人」といえばホメーロスを指したごとく、「抒情詩人」といえば彼のことを意味するようになった。」という。（松原著）
- (7) ソロン：前639年頃～前559年頃。アテーナイの立法者でギリシア七賢人の1人。「当時激しくなっていた貧者と富者の抗争を打開するべく」、いわゆる「ソロンの改革」を行なった。また「詩才に秀で、美少年たちに捧げた恋愛詩や、教訓詩、政治活動をうたった簡潔な作品を残し、それらは現存するアテーナイ最古の文学として知られている。」という。（松原著）
- (8) ミーレートス：小アジア西岸のギリシア系都市。「オリエント先進文明との接触で哲学・科学など諸学問が他のギリシア諸国に先駆けて栄え、特にタレース、アナクシマンドロス、アナクシメネースなどの自然哲学者を輩出、イオーニアー哲学のミーレートス学派を形成した。」とされる。（松原著）
- (9) アナクシマンドロス：前610頃～前546頃。ギリシアの自然哲学者でイオーニアーのミーレートスの人。「散文でギリシア最古の哲学書『自然について』を著したというが、散佚して僅かな断片のみ残存。万物の根源を「無限なるもの」と見なし、この永遠にして不滅の“神的”原質から冷・熱・乾・湿が分出し、それらと対立する要素の抗争から万象が派生すると説いた。」という。また「生物学説では「適者生存」による一種の進化論的説明を下し、人間は魚に似たものから変化したと唱えた。」という。（松原著）
- (10) ピュータゴラス：前582/581頃（または前572頃）～前497/496頃。ギリシアの哲学者・数学者・宗教家でイタリア派哲学の創始者。「自身の教説に基づく宗教的結社

ピュタゴラス教団を組織し、多数の門弟を擁して政治を左右するほどの勢力を築いた。靈魂の不滅や輪廻転生、死後の応報を説き、解脱を得るために肉食の禁止や無言の行などの戒律を課した。」とされる。また「教義は秘伝で書物を著わさなかったが、数学や音楽を深く研究し、「ピュタゴラスの定理」や音階のもつ数的関係を発見（「ピュタゴラスの定理」は早くよりバビロニア人の中で用いられており、彼はそれをギリシア世界へ導入にしたに過ぎないが）、万物の根源を「数」に求めるに至った。」という。また、ピュタゴラス教団は前300年頃に消滅したが、「彼らは、幾何学よりも数論を重視し、数学的理論や音響学や天文学説に適用、発展させた。」とされる。（松原著）

- (11) ἰσομοιρία イソモイリアー：同じ分け前、共有。
- (12) ファイシス：自然成長の原則、《成長源としての》自然、成長するもの。本継続研究（1）の第Ⅳ章＜注記と考察＞12.を参照のこと。
- (13) human nature：「人間の自然性」であり「人間の本性」であるもの、つまり「人間性」。本継続研究（1）—対象としているのは英訳版第Ⅰ巻第2編「アテナイの精神」の「3ソフィストたち」のなかの「教育の理論と教養理念の起源」—の第Ⅳ章「人間形成と human nature の意識化」の＜訳文＞を参照のこと。なお該当箇所については本継続研究（1）では（第二巻）と記したが、本継続研究（3）で確認した表記に従い、第Ⅰ巻（第2編）、に改める。
- (14) B. ファリントンは、ソクラテースの評価に関わって、「要するに、ソクラテースは、タレスからデモクリトスに至るイオニアの思想家たちによって発展させられていた自然と人間についての科学的見解を投げ捨てて、その代わりにピタゴラスとパルメニデスから発展してきていた宗教的見解を置いた。かれは、哲学を天界から地上に引きおろしたどころか、かえって地上の人間を天に帰らせようとした。」と述べ、トゥーキュディデース、デーモクリトス、ヒポクラテースに関しては、「その世界観において、ツキディデースとデモクリトスとヒポクラテース集典中の優れた著者たちとのあいだには極めて密接な類似点がある。そしてこれらすべてに共通しているのは、人間が自然の所産であるように人間の諸性格は社会の所産であるという考えである。」と評している（出隆訳『ギリシア人の科学—その現代への意義—（上）』岩波新書、1955年）。ここには、イエーガーが human nature を重視しながら古代思想を検証していく文脈とは原理的に異なる解釈がある。この違いは、古い問題とは思われないので、トゥーキュディデースを扱うときに慎重に検討してみようと思う。
- なお拙論「想起に関する研究—社会教育（自己教育・相互教育）の原理をたずねて—」（都留文科大学大学院紀要第7集、2003年3月、所収）では、トゥーキュディデースの思想とヴァイツゼッカー大統領演説（1985年）の思想とを、相関するものとして考察している。
- (15) (φύσις τοῦ παντός) は、英訳版で挿入されたもの。
- (16) ヒポクラテースの膨大な著作については、大槻真一郎を編集・翻訳責任者とする、研究者集団による翻訳『ヒポクラテース全集』（全三巻）がある（エンタプライズ、1985年、1987年、1988年）。この引用句は、その第1巻に配されている「空気、水、場所について」の第一節、第二節の部分に該当する。なお小川政恭訳『ヒポクラテース

古い医術について 他八編』(岩波文庫、1963年)では「空気、水、場所について」が冒頭に配されている。小論での訳は、『パイディア』の英訳版を用いている。なお、「ヒポクラテスの著作」とされるものの意味については、小論のイエーガーの論述そのものを参照のこと。

- (17) ヒポクラテス全集の中で言われている、人間の病気を総合的な関連のなかで理解するという見地はきわめて本質的で、現代的である。また「医学(医術)」を超えて応用されるべき原理である。
- (18) ミーレートス：エーゲ海に臨む小アジアのイオーニアの古代都市で、海上交通の要衝として栄える。とくに前7世紀後期から前5世紀初期にかけて哲学、科学が栄え、タレス、アナクシマン드로ス、アナクシメネスらの自然哲学者を輩出し、ミーレートス学派を形成した。(松原著)
- (19) *On the divine disease* (「神聖病について」)：この文献については、訳者の概説文に次のような説明がある。
- 「この作品は、説明が困難で治癒しにくいことから神がかりの病気と信じられていた癲癇性の疾患について、その俗説を排し、この病気を他の病気と同様、自然の原因によって捉えようとするきわめて啓蒙的かつ論証的な書物としてヒポクラテス全集中でも特異な位置を占め、ヒポクラテスによる第一級の医学論稿として古来多くの賛辞に包まれてきた。しかし近代以降はこれをヒポクラテスの真作と見なす説はさほど有力ではない。」(『ヒポクラテス全集 第2巻』)
- (20) アナクサゴラス：前500頃～前428頃。イオーニアの自然哲学者で、アテーナイに移住し、ミーレートス学派の自然哲学をアテーナイに導入し、「政治家ペリクレスや悲劇詩人エウリーピデースらの師となった」とされる。彼の主著『自然について』は断片のみが伝えられているという。(松原著)
- (21) ディオゲネース：前499頃～前428頃。折衷主義の自然哲学者で、「青年時代のソークラテースの師の一人であったと考えられる」という。(松原著)
- (22) アルクマイオン：前500頃活躍。「クロトーンの医師、科学者。ピュータゴラスの弟子。自然科学に関する書物を著わし、ピュータゴラスの思想を人体に適用して、肉体は相反する諸要素の調和により健康を保ち、その調和が破れると疾病を生ずると説いた。動物解剖を通じて人体構造の研究に役立て、またギリシア人として初めて眼の手術を行ない、脳は感覚器官と通じており、知覚や思考を司る中枢であるとした。ヒポクラテースと並んでギリシア医学の父と称される。」(松原著)
- (23) エンペドクレス：前495/490頃～前435/430頃。ギリシアの哲学者、詩人、政治家、神秘宗教家で、シケリアで生まれる。「風を鎮めたり、河の流れを変えたり、疫病を追い払ったり、息絶えた女を蘇生させたりといった奇跡を演じてみせたため、魔術師・予言者ないし医者としても名を馳せる。イタリアの医学派の創設者とも見なされている。哲学はピュータゴラスまたはパルメニデースに学んだとされ」という。また「万物は地・水・火・風の4元素の混合からなり、「愛」と「憎」の2力により結合と分離が起こると説明」したという。(松原著)
- (24) ヒッポーン：前5世紀後半の、サモス出身の折衷主義哲学者。松原著には、「主にペリクレス時代のアテーナイで生活。タレスに倣って、万物の始源を水と見なした

が、この推論は精液の性質から導き出したものである。彼はまた、五感で認知し得るもの以外の存在を否定、その物質主義ゆえに無神論者だと非難され、喜劇詩人クラテューノスから「ディアゴラスの徒」として揶揄されている。」と記されている。

- (25) 医術文献の検証をとおして、自然哲学と医術との交流・交渉の重要な経緯が確認されている。このことについて、『古い医術について 他八編』（岩波文庫）の訳者である小川政恭はその訳書の「解説」のなかで、「医術と哲学との争い」として、次のように述べている。

「ところで医学は哲学と相たずさえて起こりながら、すでに前5世紀にはこれと争いはじめている。その著しいものとして『ヒポクラテス集典』中の「古い医術」という論文は、アグリゲントのエンペドクレスのような哲学的傾向を排除しようとしている。すなわち、熱・寒、乾・湿といった仮定から出発してこれらを病気の根本原因であるとなし、治療もまたこれらに頼ろうとするところの哲学的傾向に対して反抗し、すべて経験から出発し経験によって検証すべきことを主張している。この論文の著者はその用いている方言からイオニアのギリシア人であったと考えられるが、宇宙論的見解からアプリオリに医療の諸規則を演繹しようとするところの西方の医学派に対しても争っているのである。先に医学の先駆として述べたピタゴラス派の学徒アルクマイオンの流れは、この頃すでにその科学としての質が低下していたものであろう。しかし何と言っても一番医療にとって良くない影響を与えたのは、エンペドクレスの学派であったと考えられる。」

3. 「‘ヒポクラテースの’全集」とされるものについて

<訳文> 8p~10p

ここでわれわれは、この文献が呈する文献学的な問題の簡略な検討をしなければならない。その多くが保存されたという事実、それが書かれている文体の形式、そしてそれが後世へと伝わってきた特有の方法、これらは、それがコースという小さな島の有名な医術学派⁽¹⁾の実地と教授によって生み出されたということを示している。この学派はその有名な指導者であるヒポクラテースの下に、5世紀後半において、最高の勢力を獲得した—その彼は、4世紀初頭におけるプラトーンにとって医術の具現 (embodiment, die Verkörperung) そのものであるし (ちょうどポリュクレイトス⁽²⁾とペイディアース⁽³⁾が彫刻を具現化している (embody) ように)、また彼は、アリストテレースによって偉大な医者⁽⁴⁾の完全な例として引かれている。100年後でさえ、学派はまだ輝かしい統括者をもっていた—Praxagorasで、彼は脈拍の理論を作り出した。5世紀、そして4世紀から生き残ってきた完全な医術論文のすべてがヒポクラテースの名を冠しており、それらは *en bloc* (一括して)、つまり定まった形をした全集として (in der Form eines festen Schriftencorpus)、われわれに伝えられてきたのである。しかし現代の学問は、それらがすっかり一人の著者の作品であるということとはあり得ない、ということを明らかにしてきたのであり、というのは、個々の論文はしばしば矛盾しており、また相互に非難しあっている。このことは、古典時代のこの主題の研究者たち (students of the subject, der Hippokratesphilologie ヒポクラテース文献学) にも知られていたのであって、というのは、ヒポクラテースは、アリストテレースと同様に、ヘレニスティックな時代に精神的

な復興 (a spiritual rebirth, der geistigen Renaissance) をし、その時代にヒポクラテースとアリストテレスの研究の諸学派が目覚めたのであって、それらは、ギリシア文化 (culture, Kultur) が—それとともに医学が—生き続ける限り存続した。ガレーノスの、ヒポクラテースの著作に関するおびただしい博学な注釈、そして後期グレコローマンの世界以来、完全であれ断片であれ、生き残ってきたあらゆるヒポクラテースの辞書や注釈は、われわれに、この分野の学問についてなにがしかのことを教えてくれる。われわれは、ヒポクラテースの大量の論文から本当のヒポクラテースがなお抽出され得るといふその確信を共有することはできないけれども、その技量と知識には尊敬しないわけにはいかない。現代の批評家たちもまた、収集物から一定の著作を除外するよう、またヒポクラテースその人に帰するものとするよう、企ててきたのであるが、しかしその数はどんどん減ってきたし、また、(全集を代表するとされる多くのものの中で) それぞれの研究者がヒポクラテース自身の特徴なのだと思える医術思想の特定の観点に応じて変化する。だから、そうした勤勉で明敏な研究にもかかわらず、われわれは諦め、ことの真実についてのわれわれの無知を認めなければならないように思われる。^{<15>}

他方、非常に多くのこれらの‘ヒポクラテース風の’論文があり、その結果、真のヒポクラテース探しの間に、学者たちは思わず知らず、ギリシア精神 (thought, Geistes) の古典時代における医学 (medical science) のより詳細な像を作りだしていたのである。今までのところ、その輪郭だけが明らかなのだけでも、それは驚くほど興味深い光景である。それは、単純に一つの学説体系を示すだけでなく、われわれに科学の正に生命 (the very life of a science, den lebendigen Prozeß einer ganzen Wissenschaft 科学全体の生き生きとした過程) を、そのあらゆる分枝や矛盾とともに、見せる。明らかになってきていることは、われわれが今持っているような全集は、ヒポクラテースの、彼の時代に本屋で売られたような‘全集 (Collected Works, Sämtlichen Werke)’ではなく、前3世紀のアレクサンドリアの学者たちによってコース島の医術学派の文書館 (archives, Archiv) の中に見出された、古い医術の著作の全収集物 (collection, die Summe 総和) なのであり、その学者たちは、後世の人びとのためにヒポクラテースの著作を (他の古典的作家たちのものと同じように) 保存しようと企てたのであった、ということである。⁽⁴⁾ 明らかにそれらは、校閲も、異質な事項を取り除くこともされてこなかった。それらのいくつかは文献として公刊され、あるいは少なくとも出版用に書かれた。他のものは元の資料のおびただしい集成 (collections) であった。また他のものは、公衆によって読まれるためではなく、著者の同僚たちの参考のために書かれた、解説書であった。そしてその収集物 (collection) のいくつかはまったくコース学派の中で書かれたものではなかったのである—きわめて当然のことで、というのは、科学は、もし科学者が他者の考え (the ideas, gedacht) や発見 (discoveries, erkannt) にまったく注意を払わなければ、すぐに行き詰ってしまうことだろう。これらの外来の著作は学派の文書の中に保存され、また師匠の著作は彼の弟子たちのものとごちゃまぜにされたのであって、なぜなら学派は非個人的な団体 (institution) だったのである。それに、加うるに、その全構成員は自分の同僚たちの意見がどのようなものであるのかを知っていた。⁽⁵⁾ われわれは同じ種類のことを、ヒポクラテースの場合に比べるとわずかなものではあるが、偉大な哲学学派を率いたプラトーンやアリストテレスのような人物の全集 (the collected works, literarischen Nachlaß 遺稿)

のなかにも、見出すのである。<16>

ヒポクラテースの「誓い」(oath, „Eid“), それは一門 (the school, die Zunft ツンフト、仲間) に入ることを許されたすべての者によって宣誓されるべきものであったが、その厳粛な条項の中の一つは、その者は自らが学んだことは秘密を守らなければならない、というものであった。⁽⁶⁾通常、専門職において (in the pfession) 息子が父に従ったように、医術の知識は父から息子へと引き継がれた。このように、見知らぬ者が生徒 (a student, Schüler 弟子) として受け入れられるとき、彼は、いわば彼の先生の息子となったのであり、そしてそれゆえに、自分の技術を謝礼金無しで自分の師匠の子どもたちに教えることを誓ったのである。<17>生徒にとっては (徒弟のように)、自分の師匠の技量 (practice) を、彼の娘と結婚することにより相続することは、おそらくきわめて普通のことであった。ヒポクラテースの娘婿であるポリュボス (Polybus) は医者であった、と明確に伝えられている。⁽⁷⁾たまたま、彼はアリストテレスが名前で引いているコース学派の唯一の構成員である一つまり、‘ヒポクラテースの’ 全集 (corpus, Corpus) の中のもっとも有名な著作の一つに現存している、彼の静脈組織 (the venous system, des Adersystems 血管組織) の詳述を、引用しているのである。<18>その一特徴は、全収集物 (collection, Sammlung) に一つの明るい光を投げかける。ヒポクラテースの時代においては、偉大な個人の人格の権勢 (dominance) は、医術において影響力をもち始めてはいたが (詩歌や美術においてははるかに早期の段階で、また哲学においてはまさに最初から、そうであったように)、医者仲間 (the medical profession) の共同的結束はまだ非常に強かったので、職業上の実践においては、着想や理論がその創始者に帰されることは稀であった。明らかに、医療 (medical) 研究者が初めて自分たちの個人の見解を自分自身の名のもとに広めたのは、公開講演においてであった。そのようないくつかの講演は、やはりヒポクラテースの全集に存在しているが、しかしその著者たちでさえ名前は失われている。他の学派に由来する著作—小アジアのクニドス⁽⁸⁾の、かなり古く、同時に著名でもあった医学校 (medical institute, Ärzteschule) に保持されていた見解を提供している ‘クニドスの学説 (doctrines, Lehren)’ のような—が、ヒポクラテースの論文で引用されているが、<19>しかし今日までどの学者も、何らかの現存する論文がコース島の外の特定の学派の信頼すべき刻印をもっているということの証明には成功してこなかった。5世紀の終わりには、個人は自分の見解を表現する非常に広い自由をもっていたので、われわれはコースの理論 (theory, Linie 路線) からのあらゆる逸脱を、他の学派の学説 (doctrine, Konstruktion) の証拠として合理的に使うことはできない。それでも過去100年間の研究は、クニドスを中心とするアジアの (Asiatic, kleinasiatisch- 小アジアの) 学派と、シケリアーを中心とする西部ギリシア学派との、<20>双方の存在を証明してきたのである、といっても、そこでなされた仕事についてのわれわれの知識は、証拠がないので、断片的であるほかないのであるが。

<注記と考察>

- (1) コース島：ヒポクラテースの出身地で、彼が開いた医学派 (「コース学派」) からは歴代の名医が輩出された。(松原著)
- (2) ポリュクレイトス：前480頃～前410頃。ギリシア古典期の著名な彫刻家で、「青銅彫刻

を得意とし、特に裸体の男性運動競技者像に優れていた」とされ、「その理想的な人体比例という観念は、…ルネサンス期の芸術家たちにきわめて大きな影響を与えた」とされる。(松原著)

- (3)パイディアース：前490頃～前417頃。アテーナイ出身の彫刻家で、「古代全般を通じて最大の彫刻家と評されている」。「ペリクレスと親交を結び、アクロポリス復興事業の顧問となり、前447年パルテノン神殿の造営が始められるや、その総監督として活躍」した。(松原著)
- (4)イェーガーは『パイディア』のなかで、一群の古代の著作が保存されてきたという事実そのものに、注意深い考察の眼を向け続けている。本継続研究 (3) の第Ⅱ章4節<注記と考察>(18)、など参照のこと。
- (5)この一文は、英訳版で追加されたものである。
- (6)ヒポクラテースの全集の中の、有名な「誓い」という文書の中に書かれている(『ヒポクラテース全集』第1巻、所収)。
- (7)ポリュボス：アリストテレスは、ヒポクラテース全集のなかの『人間の自然性について』における血管の叙述(第11節)を、ポリュボスの記述として引用している(『動物誌』第3巻第3章、岩波書店『アリストテレス全集7』1968年、所収)。
- (8)クニドス：小アジアの都市。「この地の医学派(クニドス学派)はコース島の教義学派に対する経験学派の本拠地として名高かった」という。(松原著)なお、クニドスの近くにコース島がある。

4. ‘素人 (layman, Laien)’ と ‘専門家たち (professionals, Fachleute)’ の区別の現れ <訳文>10 p～12 p

医学に関する文献 (medical literature, die ärzliche Literatur 医師の文献) は、この理由で、ギリシア精神史におけるまったく新しい経験であり、それは教えること、しかも直接に教えることが意図されていたのではあるが、それが普通の人に話しかけられることは、それがあつたにしても、哲学や詩とちがって、ごくわずかなことだったのである。その出現 (its appearance, das Auftreten der literarischen Medizin 文書による医学の出現) は、今やわれわれがますます注意を払うことになる、歴史的な傾向の主要な例であり—つまり、生活がいよいよ専門化する (specialized, Technisierung 技術化) 傾向、あるいは知識が、高い知的、倫理的資質をもつごく少数の専門的に訓練された人間にしか就き得そうにない特定分野の専門性 (sectional professions, besonderer Berufsstände 特殊な職能階級) へと分割される傾向のことである。医学の著者たち (the medical authors) がしばしば‘素人 (layman, Laien)’ と ‘専門家たち (professionals, Fachleuten)’ のことを話しているということとは意義深いのであって—長い、重要な歴史をもつことになった区別であるが、しかしそれは、ここで初めてわれわれに出会う。⁽¹⁾中世の教会に起源をもつわれわれの言葉 ‘layman’ (平信徒) は、最初は聖職にはない人間を、そしてそこから職業上の秘伝を授けられていない人間 (a person not initiated into professional secrets, den Nichteingeweihten 神聖にされていない人) を意味したのであるが、しかしギリシア語の *idiotés* (イディオテース)⁽²⁾ は、社会的、政治的な含意を引いている。それは、国家や共同体 (community, der menschlichen Gemeinschaft 人間の共同体) の世話はず、ただ自分の私事に精を

出す人間を意味する。そのような人間と対比して、医者とは *demiourgos*（デーミウールゴス）⁽³⁾、つまり ‘public worker 公共のために働く人’（öffentlich tätig 公的に働いている）である—さらに言えば、人びと（the public, die Leute）のために靴（shoes, Kleider 衣服）や道具（utensils, werkzeug）を作るあらゆる職人がそう呼ばれているように。しばしば素人は、この見地から、‘the people 住民（„Angehörige des Demos“ 居住区の一員）’（δημῶται）と呼ばれることによって、医者とは区別される。⁽⁴⁾ *demiourgos*（デーミウールゴス）という名称は医者（profession）の二つの側面—その社会的、および技術的な面—を生き生きと結びつけているが、しかるに、翻訳がむつかしいイオーニアのことば χείρωνας（ケイローナクス）⁽⁵⁾（これはその同義語として使われている）は、ただ後者の面のみを意味している。⁽⁶⁾ 高い技量をもつギリシアの医者（artisan, des Handwerkers）と考えるものから区別することばはないのであり、したがって同じことばが彫刻家や画家（the sculptor and the painter, dem bildenden Knstler 造形芸術家）にも当てはまる。とはいえ、ギリシア語の医術（medicine）には、われわれの、‘uninitiated（まだ入門していない）’（Uneingeweihten 神聖ならざる人）という含みをもつ、‘layman’ という言葉の使い方に似たものが在る。⁽⁶⁾ それは、ヒッポクラテースの「法（Law, „Nomos“）」⁽⁷⁾の美しい終わりの部分のことであり、次のように書かれている。⁽⁸⁾ 秘伝の事柄は、入門者（initiates, geweihten Menschen 神聖なる人々）のみに明かされる。それらを俗人たち（profane persons, den Profanen）に、彼らが知識の秘儀（the mysteries of knowledge, die Mysterien der Erkenntnis）を伝授してもらう前に、明かすことは禁じられている。’ ここにおいてわれわれは、あたかも宗教的儀式に拠るかのよう、二つの階級に分割された人間をもつのであり、その一つは厳密に、秘密の（arcane, verborgen）知識から締め出されている。この考えの趣旨は、医者（profession）の重要性を、単なる職人のそれよりも、技術的にも社会的にも高く引き上げるのであるが、しかしそのこと以上に、それが、医療職の高尚な性質と自らのその義務の深い意識との雄弁な証明となるのであり—つまりそれは、ヒッポクラテース自身によっているのではないにしても、疑いもなく、自分の職業がその増大する自然についての知識から獲得してきたものを理解した誰かによって、書かれたものである。⁽⁸⁾ 確かにそれは、この新しい種類の、つまり社会機構のなかで孤立した、しかし強い自負に充ちた医者（profession）の、位置について、ある本当の困難さが感じられていたということを示している。

<注記と考察>

(1) 現代へとつながる「素人」と「専門家」の対立・矛盾とその論議の、世界史的な源のことが指摘されている。この社会事象は、現代社会の基本構造に関わる広大な問題群につながるが、それらの問題群の一例として、教育行政理論における、「素人統制（layman control）」と「専門的指導性（professional leadership）」の原則についても思い起こしておきたい。それらの問題群のもう一つの例として、戦前日本の唯物論哲学者である戸坂潤（1900～1945）の「科学と科学の観念」（1941年6月）の一文も想起しておきたい。戸坂は「科学」という観念は「専門観念」ではなく「素人観念」であろうと洞察し、次のように記している。

「科学が日常生活に食いつらなくてはならぬというのは、科学が専門家の専有物

や、専門家からの天下りの物だということの反対で、つまり科学は素人自身の産むべきものだけということだ。して見れば科学という観念は、素人のものでなくてはならぬ。素人の自主的な観念の筈である。」(『戸坂潤全集』勁草書房、第一巻、所収)

この戸坂の「科学の観念」の問い直しの提起は、ファシズムの時代(イエーガーが深い洞察力を働かせた時代)の極限状況における彼の「科学の大衆性」論、「常識・見識」論、「ジャーナリズム」論、「クリティシズム」論、民主主義や人間性の論と連続しており、彼の「教育と教養」(第四巻、所収)は、これらの論を骨格にして理解され得る。戸坂は敗戦を目前にして獄死したが、戸坂の哲学探究(唯物論)とソクラテースの刑死=プラトーンの哲学探究(観念論)とは、一群の知識人たちを見事にリードした事実を含め、その思想の関連は本質的である。戸坂潤の思想理解ということでは、拙論「社会教育研究としての戸坂潤研究—「科学の大衆性」概念を軸にして—」(東京大学教育学部社会教育学研究室『社会教育学・図書館学研究』第2号、1978年、所収)、「教育思想研究方法の一試論—戸坂潤の世界とその歴史的評価をめぐって—」(中央大学教育学研究会『教育学論集 第二十七集』1985年3月、所収)を参照されたい。なお、ドイツ語版の戸坂潤選集が出版されている *TOSAKA JUN Ideologie—Medien—Alltag* (Leipziger Universitätsverlag 2011)。

改めて、確認メモということであるが、イエーガーはここでは、職業の専門化(分化)と知識の専門化(分化)とが同一の過程として進んだと指摘している。

- (2)イディオテース (ιδιώτης) : (国家に対し) 個人、(王・支配者・役人、等に対し) 私人、(専門家に対し) 素人、など。
- (3)デーミウールゴス (δημιουργός) : 公益の、人のために働く、(名詞化されると) 共同体のために働く人、職人、芸術家、彫刻家、支配者、など。
- (4)この箇所は、ドイツ語版では次のようである。

Als Gegenstand der demiurgischen Tätigkeit des Arztes werden die Laien oft auch nur „Angehörige des Demos“ (δημόται) genannt.

(医者(demiurgischen Tätigkeit(「公益的な働き」)の対象として素人はしばしば „居住区の一員“ とさえも呼ばれる。)

- (5)χειρωναξ (ケイローナクス) : 手工芸者、手工業者、職人
- (6)ドイツ語版では次のようになっている。

「ところで、専門家および素人の (des Fachmanns und Laien)、神聖なる人および神聖ならざる人 (dem Eingeweihten und Uneingeweihten) との我々の対比は、ヒポクラテースの「法」のあの美しい結びのことばに見られるギリシア医術に、それに比較しうるものがある、そこでは次のように述べられている。‘神聖なることは神聖なる人々 (geweihten Menschen) のみに明かされるのであって、それらを俗人たち (den Profanen) に、彼らが知識の秘儀を知らされる前に、示すことは禁じられている。’]

- (7)ノモス (νόμος) : 慣習、掟、法(律)。『ヒポクラテス全集 第1巻』では、「法(医の本分)」として訳出されている。その全文が、本節末尾のイエーガーの論述の根拠になっている。イエーガーが直接に指摘している箇所(「法」の末尾)は、次のように訳

されている。

「さて神聖なることは神聖なる人々に示されるものである。俗なる者には、真理探究の神秘の洗礼を受けないかぎり、それを示すことは許されないものである。」

なおこの「法」には、イエーガーの論述そのものからは離れるが、教育研究として注目される記述があるので、その部分を下記に引いておく。

「医術を習得するというのも、実際のところ、大地に生えるものを見守るということに通ずる。つまり、我々の生まれつきの資質はいわば土壌である。そして医術を教える者の教説は土壌にまかれる種、ということになる。さらに、幼少から教育を受けるというのは、ちょうどよい時期に種が耕地にまかれることに相当し、教育を受ける場所は、いわばまわりをとりまく空気からやってきて種から生ずるものを養う養分に相当する。勤勉は毎日の耕作にあたり、そして年月は種から最後まできちんと育つようにこれらすべてを強化育成するものである。」

この記述に類似するものが、イエーガーが論及している箇所であるが（「本継続研究(1)」の第Ⅶ章）、プルータルコス（後46年頃～後120年以後）の「子供の教育」にあり、その部分を下記に引いておく（河野與一選譯『プルターク『倫理論集』の話』岩波書店、1964年）。なお訳者河野は「子供の教育」について、「既に十六世紀に眞作でないと認められてそれが定説になってゐる」と説明している。

「一般に、技術や学問についてよく言はれる事だが、徳性に於いてもちやんとやつて行けるやうになるには三つのものが揃はなくてはならない。天分（フュシス）と理性（ロゴス）と習慣（エトス）がそれだ。理性とは学習の事で、習慣とは修行の事だ。出発は天分に、進歩は学習に、応用は練習に、完成はこれらすべてに関はる。この一つでも缺ければ徳性が跛になる。学習を伴はない天分は盲だし、天分を伴はない学習は片輪だし、この二つを具へない修行は中途半端に終る。農事には先づ良い土地、次に心得のある農夫、次には申分のない種子が必要だが、天分は土地に、先生は農夫に、教えと戒めは種子に當る。この三つが揃つて一つの息が通つてはじめてピュタゴラスやソクラテスやプラトンのやうな人になれる。」

cultivate（耕す）、cultivated（耕作された、教養のある）、culture（耕作、教養）には、これら二つの引用文に見られるような「耕作」のイメージがあるのだろう。ここでは、人間の基本資質が「大地」のイメージでとらえられている。私たちが普通育ちゆく人間としてイメージする「種子」は教説（知識など）ということになる。cultureとは異なり、ドイツ語の die Bildung（教養）には造形的な bildenの意味がある（「本継続研究(2)」の第Ⅱ章7節）。

- (8)ここでイエーガーが述べていることは、その指摘を受けてみると、「法」や「誓い」を含め、ヒッポクラテスの著作の随所から伝わってくる。ヒッポクラテスの著作は現代の医学にも大きな影響を与え続けていると言われるが、イエーガーの叙述は、その惹きつけるものの歴史的な成り立ちへと案内してくれる。

5. 医学者が医術を素人大衆に語る－医術の教養をもつ公衆の誕生

<訳文>12p～14p

しかし実際には、新しい医学 (the new science of medicine, die ärztliche Wissenschaft 医学) は、ギリシアの一般的な精神的な生活とそれほど鋭く一線を画していたわけではなかった。それは、そこに自分自身の場所を確立しようと努めた。それは公衆 (the general public, dem Laien 素人) から離れたところに自らを置く学問の特別な一分野を基礎としていたのであるが、それは慎重に、あの知識を彼らに伝えようとし、また彼らにそれを理解させる方法と手段を見いだそうとした。それは、医療従事者ではない (non-medical) 読者に語られる、特別な種類の医学文献 (medical literature, medizinische Literatur) というものを生み出した。幸運にも、われわれはまだ次の双方の種類のいくつかをもっているのであり一つまり、専門家に向けて書かれた論文と、そしてもう一つは一般公衆に述べられたものである。われわれが持っている著作の大部分は最初の部類に属しており、ここではそれらにふさわしく十分に扱うことはできない。われわれの関心は当然にも第二の種類に集中するのであり、それは、その著作の質が非常に高いからだけではなく、それが実に、ギリシア人がパイダイアーと呼んだものの一部分だからである。^{<23>}医学者たち (medical scientists) が初めて自分たちの問題を公衆の前にもたらしたときは—ソフィストたちのそのように講演により (ἐπιδείξεις 演説で)、また読まれるように書かれた‘語り’ (λόγοι) により—だれも、*idiotés* (ιδιώτης: 素人) がそうしたことでどれほど心をわずらわせるべきかを本当には知らなかった。医者たちが、巡業するソフィストの講演と張り合うように進み出たとき、彼らは公的な名声と権威とを獲得しようとしていたのである。彼らの知的な卓越性は彼らの主題における一時的な関心を引き起こすだけではなく、医学的公衆 (medical public, den neuen Typus des ‚medizinisch Gebildeten‘ (新しい種類の ‚医学的教養人‘)) のようなものを生み出すのにも実に十分だったのである。それは、専門的ではないけれども医療問題に特別な関心をもっている、そうして、その主題について何の意見ももたない一般大衆とは、そのような主題について判断を下す能力があることによって区別される、‘医学の教養をもつ (medically cultured)’ 人間によって成り立っていた。もちろん医者にとって、医術の考えを素人の公衆に紹介する最高の機会は、彼が実際に自分の患者の治療をしているときであった。『法律』においてプラトーンは、奴隷の医者 (the slave-doctor) と、科学的に訓練された、自由人を治療する医者 (physician) との違いについて面白く描写している。彼が言うには、その違いは、彼らの自分の患者に対する姿勢に存するということである。奴隷の医者は、論議もなく (ἀνευ λόγου 論議なしに)—すなわち、かれの処置の説明もなく、単に慣例の手順とそれまでの経験に基づいて働き、処方箋と指示を与えてベッドからベッドへと急ぐ。彼は絶対的な暴君である。⁽¹⁾もし彼が、自由な医者が自由な患者とまるで科学的な教え (τοῦ φιλοσοφεῖν ἐγγύς) のように話すのを、また病気の原因を身体全体の本性 (nature) にもどって決めていくのを聞かざらば、彼はおそらく心から笑って、そのような場合いわゆる医者のおほとんどが言い返すことを言うことであろう、つまり‘おばかさんだね、あんたは自分の患者を *curing* (治療している) のじゃないよ、あんたはまるで、彼を健康にすることではなく、彼を医者にすることを望んでいるかのように、彼を *educating* (教育している) のだよ’ と。⁽²⁾^{<23a>}しかしプラトーンは、患者の根本的な (fundamental, gründlich 非常に丹念な) 教育 (education, Belehrung 教え) に基づくまさにその医療方法 (medical method, ärzlichen Paideia 医療の教育) を科学的な治療法 (healing, Therapie) の理想 (the ideal, das Ideal) だと確信して

いる。彼はその見解を、同時代の医学 (medical science, Medizin) から引き取っている。ヒッポクラテース全集のなかに、われわれは、医者の問題 (physician's problem) を素人に教える最高の方法についての論考をいくつか見いだす。‘この技術を話すときには、素人が理解できるように話すことがとくに必要である’と *On ancient medicine* (「古来の医学について」) の著者は言っている。⁽³⁾ 人は、人びとが現に患っている病気のことから始めなければならない。確かに素人であるので、彼らは自分の病気の、その原因と治療法を理解することはできないが、しかしそうしたことを彼らに説明することは、それぞれに自分の経験を思い出させるだけであり、容易い。⁽⁴⁾ その著者は、医者への陳述が患者の想起と一致するかどうかは彼の技術を証明する、と言う。^{<24>}

われわれは、この著者が素人の教え方を論じている、あるいは直接に彼らに向けて話している、その文章の全部を引用する必要はない。すべての医者が、誘導的に話を続け、患者を彼自身の経験から集められた情報によって助ける、という彼の (des Autors, Über die ältere Medizin ‘古い医学について」の著者の) 提案に従ったというわけではなかった。或るものは、異なる見地で、あるいは異なる事情のもとに、正反対のことをし、素人の聴衆の前に、病気の本質の一般理論を念入りに述べたり (論文「人間の自然性について」の著者のように)、あるいは (「術について」の著者のように) 公衆に医学が真の技術 (art, Techné)⁽⁵⁾ であるのか否かを判断するように勧めさせた。プラトンの『饗宴』において、医者エリュクシマコス⁽⁶⁾ は夕食後に、素人たちに長い機知に富んだレクチャーを行なうが、それは医学と自然哲学の見地からの Eros (愛)⁽⁷⁾ の本質に関するものであった。^{<25>} 教養のある社会では、そのような話題 (such topics, diese Iatrosophisten) について、流行の自然哲学との関連によって強められた特別の関心があったのである。若いエウテューデモスのなかに、彼はのちにソクラテースの熱烈な信奉者になったのであるが、クセノフオンはこの新しい種類の医療アマチュア (medical amateur, Bildungsmenschen 教養人) を描いている。彼の唯一の趣味は知的なものであり、彼はすでに建築術、幾何学、天文学、そしてなかならず医学の諸著作をもつ、丸ごとの蔵書を購入していた。⁽⁸⁾ ペロポネネーソス戦争の間に起きた疫病 (the plague, Pest) のような恐ろしい経験が、いかに公衆によって熱心に読まれる広い医学に関する文献を生み出したか、を理解することはむづかしいことではない。トゥーキュディデース自身は医療アマチュア (medical amateur, einen ärztlichen Laien) であり、流行病の原因 (the cause, die Ursache) について相互に矛盾している多くの仮説によって、彼の病気の症状についての有名な叙述を、それは流行病の源 (origins, Ätiologie 病因) を示唆するどのような試みも慎重に避けているが、書く気にさせられたのである。⁽⁹⁾ ^{<27>} それでもそれは、その術語の詳細さにおいてさえ、彼の、その主題 (subject) の専門的な文献の綿密な研究をおのずと示している。

<注記と考察>

- (1) ここで叙述されている「奴隷の医者」の患者への接し方は、比較的近年までの日本の医療現場の姿でもあった。そしてこの前後で述べられていることは、現在目指されている、医療関係者と患者との関係改善の本質というべきことがらであろう。‘インフォームド・コンセント’ はギリシアの時代からの歴史的経験ということになる。
- (2) イェーガーが『法律』から引いている箇所は、次のようである (森進一他訳、岩波文

庫 (上・下)、1993年) による。

「アテナイからの客人 ところで、あなたはまた、こういうことにも気づいておられるでしょう。国内には奴隷の病人もいれば自由民の病人もいるのですが、そのうち奴隷に対しては通常ほとんど奴隷〔の医者〕が走りまわったり、あるいは施療所で待機したりしながら、その診療にあたっています。そして、そうした医者は誰も、一人ひとりの奴隷の病気それぞれについて、なにかの説明をあたえもしなければ、うけつけもしない。むしろ、経験からしてよいと思われる処置を、あたかも正確な知識をもっているかのように、僭主さながら、自信たっぷりの態度で一人の病人に指示しておいては、さっさと、病気にかかっている別の奴隷のもとへ立ち去ってゆく。そして、そのようにして彼は、病人を診療する主人の労苦を軽くしてやるのです。

これに対し自由民である医者は、たいていの場合、自由民たちの病気を看護し診察します。それも、病気をその根源から、本来のあり方に則って検査をし、患者自身ともその身内の人びとともよく話合い、自分の方も、病人からなにかを学ぶと共に、その病人自身にも、できるだけのことは教えてやるのです。そして、なんらかの仕かたで相手を同意させるまでは、処置の手を下さず、同意させたときでも、説得の手段によって、たえず病人の気持ちを穏やかにさせながら、健康回復の仕事成しとげるべく努力するのです。」(720 C~D)

「…つまり、いまかりに、理論はもたずに、経験だけにたよって医術を用いている医者たちのうちの誰かが、なにかの折りに、自由民の医者が自由民の患者と話し合っているところに行き合ったとしてみましよう。そしてこの自由民の医者はそのとき、哲学者が使うのに近いような言葉を使って、病気をその起源から問題にし、身体の本姓全般にまで遡って論じているとします。すると、先の〔奴隷の〕医者の方は、たちまち大声をあげて笑い出すことでしょう。そして彼がそのときに語る言葉は、いわゆる「医者」と呼ばれている者の大多数が、このようなことに関していつでもすぐに口に出しそうな言葉以外のものではないでしょう。つまり彼は、こんなふうに言うわけです。「なんと非常識な人だろうね。君は患者を治療しないで、教育しているようなものだよ。まるで相手が願っているのは、健康になることではなくて、医者になることであるかのようにね」と。(857 C~E)

(3) 引用されているのは「古い医術について」の第2節の、次の文章と判断される。

「とくにわたしに思われることは、この技術について論じる者は素人の知っていることを論じなければならないということである。」(小川訳『古い医術について』岩波文庫)

(4) 該当の「古来の医術について」の第2節の記述は次のようであり、医者、専門的な知識に基づいた丁寧な問診の様子を思い浮かべればよいだろう。

「誰でもそれぞれ自分にふりかかったことを人から聞くときは、ただそれを思いおこすことだけで事が足りるからである。」(『ヒポクラテス全集 第1巻』)

(5) テクネー (τέχνη) : わざ、術、技術、専門的技術、技芸、学問。「術について」(『ヒポクラテス全集 第1巻』) の訳注では、ソフィスティックな空虚な術ではない、「古代ギリシアにすばらしい人間文化をつくりあげた実質的で専門的な「術」の用法が指

摘され、職人たちの制作を主体とする技術から「さらに作詩・音楽・弁論・計算・医学など広く文芸・学問の領域をも含む概念となった。」と指摘されている。

- (6) エリュクシマコス：医者で、医者アクメノスの子。対話篇『饗宴』などに登場する。
- (7) Eros は Ερως（エロース）で、愛の神。ερωςで、love、つまり（男女の）愛、情事、情欲、など。
- (8) クセノポーン（前430/428頃～前352頃）はソクラテースの弟子であるが、『アナバシス』全7巻など、多くの著作があり、「その全作品がほぼ完全な形で伝存している」という（『西洋古典学事典』）。その中の『ソクラテースの思い出』で、ソクラテースの愛弟子であるエウテュデーモスのことが語られている。イエーガーが指摘している箇所では、エウテュデーモスはソクラテースに「ところで、エウテュデーモス、君はなんの達人になろうと思って書物を集めるんだね。」と問われ、医者ではない、建築家でもない、数学家でもない、天文家でもない、詩人でもない、と返答を重ねる。さらにソクラテースに「だが、まさか、エウテュデーモス、君は政治家とか経済家とか立派な支配人とかになって、他人ならびに自らの生活を幸福ならしめる、あの美德を求めているのではあるまい。」と問われ、「いかにもそれなんです、ソクラテース、その美德を求めているのです。」と返答している。（佐々木理訳『ソクラテースの思い出』岩波文庫）
- (9) トゥーキュディデースの『戦史』の中の、疫病の記述も感銘深いものであるが、イエーガーが指摘している箇所は次の文章の後段である。

「一説によると、疫病はエジプトのナイル上流地域にあるエチオピアに発生し、やがてエジプトからリュビアー帯に広がって、さらにはペルシア領土の大部分をも侵した、といわれている。アテーナイのポリスにおいては全く突然に発生したので、また最初に感染したのはペイライエウスの住民であったところから、アテーナイの巷ではペロポネーソス勢が貯水池に毒を入れたのかも知れぬ、という噂さえ流れた。ペイライエウスには、清水の泉がまだなかったのである。やがて病害はペイライエウスからアテーナイのポリスに及び、ここにいたって死亡者の数はたちまち激増した。この疫病の、あり得べき原因（origin）とか、また人体にかくも甚だしい異常をきたすに足る諸因（causes）については、医学者（physician）も市井人（layman）も各々の意見を持っていることと思うので、私はあえてこの点について意見をさしはさまない。ただ私は病状の経過について記したい。またいつ何時病魔が襲っても、病状の経過さえよく知っていれば誤断をふせぐよすがにもなろうかと思ひ、自分自身の罹病経験や他の患者の病態を実見したところをまとめて、主たる病状を記したい。」（久保正彰訳『戦史』、岩波文庫、上巻、挿入した英文はローブクラシカルライブラリーに拠る。）

6. 専門領域と‘教養のある人間’ —「パイダイアー」が「一般教養」の意味をもち始める <訳文>14 p～15 p

アリストテレスは彼の著書『動物部分論』を、このようなことばで始めている<28>：‘あらゆる科学については、それが高貴なものであれ卑賤なものであれ、二種類の可能な態度がある。一つは科学的な学識（knowledge, erkenntnis 知識）の名に値するものであ

り、もう一つは教養 (culture, Bildung) (παιδεία) のようなものである。というのは、教養ある人間 (the cultured man, des Gebildeten 教養のある人) の特徴は、彼が、他人の説明が正しいか間違っているかを正しく判断できるということである。このことは實際上、われわれがすべてにわたって教養のある人間 (the generally cultured man, des allgemein Gebildeten 普遍的な教養のある人) であると考えるところのものであり、教養 (culture, das Gebildetsein 教養があるということ) とはそのようなことをする能力のことである。⁽¹⁾ ただし、われわれは、教養ある人間 (the cultured man, dem Allgemeingebildeten 普遍的な教養のある人) は自分一人でほとんどすべてのことについて判断できる、と考えるのであり、しかるに他の人間は、ただ一つの専門領域 (only one special field, ein Spezialgebiet) に対してだけそうできる。というのは専門領域においてもまた、われわれが述べてきたような普遍的な種類 (the universal type, Typus des allgemein Gebildeten 普遍的な教養のある人の種類) に該当する、教養ある人間というもの (a cultured man, eine Form des Gebildeten) が存在するに違いない。⁽²⁾ さらに彼の『政治学』において彼は、自然についての専門的な研究者 (the professional student) と、それについて素人 (amateur) として関心をもっている教養ある人間 (the cultured man, Gebildeten) とのまったく同様の区分を明確に行なっている—というのは、それが、彼が立証しようとしていることがらだからである。⁽³⁾ そこで「<29>彼は三つの異なる度合いの学識 (grades of knowledge, Wissensstufen) を述べているが、一つは開業医であり、一つは創造的な医学研究 (medical research) に従事する人間であって、彼は自分の発見を医者に伝えるのであり、もう一つは医学的な教養のある人間 (the man who is medically cultured, den medizinisch Gebildeten) である。ここでも彼は、そのような素人 (amateur) がどのような専門分野にも居るということを忘れずに付け加えている。⁽⁴⁾ 彼がこの例で証明したいと思っていることは、老練な政治家だけではなく、政治的に教育された者 (men who are politically trained, der politisch Gebildete 政治的な教養のある人) にもまた政治に関する問題を判断する資格があるということであるが、しかし彼が一例として医術 (medicine, des medizinisch Gebildeten) を選択していることは、その類型 (the type, dieser spezialisierte Typus その専門化された類型) が医術の領域においてはかなり一般的であったということを証明している。

この、ある主題 (a subject, dem Gegenstand) の専門的な学生たち (professional students, der berufsmäßigen Beschäftigung) と、それに対し単に一般教養 (general culture, persönlichen Bildung 個人的な教養) の一部として興味をもつ学生たちとの間の区別は前に現れてきていた。われわれはそれを、熱心にソフィストたちの講話 (lecture) に出席しながら、しかし専門的なソフィストそのものになろうとは少しも思っていない、若いアテーナイ市民の貴族たちに見た。⁽⁵⁾ 『プロタゴラス』においてプラトンは、非常に機知に富んだ仕方でもっとも熱烈なソフィストの聴衆でさえ自分の精神的な留保 (his mental reservations, diesen inneren Vorbehalt この内心の留保) をどんなふうに抱いているか、を示した。⁽⁶⁾ 同じことが、医術の分野では、クセノフォンの著作のエウテュデーモスに当てはまるのであり、彼は、医術の本の熱心な読者であったが、ソクラテースが彼に医者になることを望んでいるのかを尋ねたとき、彼はぞっとしたのである。⁽⁷⁾ 彼の異種の (heterogeneous, Liebhaber-愛好家の) 蔵書に示されている関心の多様性は、この初

めて現れた‘universal culture 一般教養’ (allgemeinen Bildung) の特徴である。クセノフォンは、このエウテュデーモスとの会話をとくべつな出だし— ‘ソクラテースのパイデイヤーに対する態度’ —の下に記録している。⁽⁸⁾このことは、一定の社会階層において、*paideia* という言葉が ‘一般教養 (universal culture)’ という意味をもつようになりつつあったことを示している。われわれのここでの務めは、ある特別な一分野の教養 (culture, der Bildung) の発展を追うのではなく、その多くの現れの全体のなかにそれを叙述することである。それらのなかでもっとも重要なものの一つが、医術の教養 (medical culture) であった。アリストテレスの、医術や自然科学における教養のある人間というものの概念は、プラトーンやクセノフォンが叙述するものよりも曖昧さは少ない。彼が、そのような人間は判断を下すことができると言うとき、彼は、その人がある問題に取り組む適切な方法がだいたい分かる、ということを示しており、といってもそのことは、その人がある問題についてすっかり分かっているということを含意しているのではない。科学にたずさわる学者にしか、そのことをすっかり分かるということにならない。しかし教養ある人間は判断する能力をもっており、彼の鋭い眼識 (his flair 直感・勘, sein Gefühl 感性・理解力・センス) は、しばしば創造的な学者の自らの分野のそれよりもいっそう信頼できる。純粋な専門家 (the pure specialist, dem reinen Fachwissen 純粋な専門知識) と純粋な素人 (the pure layman, dem absoluten Laientum 純粋な素人階層) との間のこの新しい類型 (type) の出現は、ソフィストたちの時代以降のギリシア教養史 (the history of Greek culture, der griechischen Bildungsgeschichte) における特徴的な現象である。アリストテレスは単にそれを当然なことと考えている。われわれはそれを実に明瞭に、初期の医術文献のなかに見ることができるが、それは大いに改宗者 (converts, Proselyten) を作りたがっている。⁽⁹⁾ 専門科学 (special sciences, der Fachwissenschaft) が一般教養 (general culture, der Bildung 教養) の領域に入る許可は、いつも固い社会的水準によって制限されており、せいぜい紳士が知るのにふさわしいもの (proper for a gentleman to know, der Vornehmheit 高尚さ・高貴さ) しか許されていない。アリストテレスにおいても、われわれは (再三再四: immer wieder) 倫理的な格率 (maxim, Maxime) に出会うのであり、そこから彼は、教養の発育にとって (for the development of culture)⁽¹⁰⁾ きわめて重大な (of vast importance, weitgehend 一般的な・広範囲な) 結論を引き出したのだが、それは、過度な専門化 (excessive specialization, eine zu große Spezialisierung) (ἀκριβεια 厳密、入念細密、完全性) は自由な教養 (liberal culture, freier Bildung) 及び真の紳士らしさ (true gentlemanliness, echter Kalokagathie 真の善美) とは調和し得ない、というものであった。⁽¹¹⁾ 見よ、科学 (science, der Fachwissenschaft 専門科学) が勝利した時代においてさえ、いかに古い貴族的な教養 (the old aristocratic culture, dieser Grundzug der alten Adelskultur この古い貴族的教養の基本的特質) がまだその誇り高い頭をまっすぐに立てていたかを！

<注記と考察>

- (1) the generally cultured man、および culture は、ローブクラシカルライブラリーでは man of general education、および education となっている。
- (2) イェーガーが引用しているアリストテレス『動物部分論』の該当箇所は、岩波書店

の『アリストテレス全集』では次のような訳になっている (第8巻、1969年)。

「およそあらゆる考察や研究には、卑賤なものにも崇高なものにも同じように、熟達の仕方が二通りあるようである。その一つはちょうど「専門的な学識」に当たり、もう一つは一種の「教養」とでもいったらよいようなものである。というのは、教養のある人なら、専門的学識はなくとも、話し手の説明の中のどこが正当で、どこが不当であるかを適切に判断することができるからである。実際、「すべてにわたって教養のある人」というのもこういう人のことであり、「そういった教養がある」ということはこういうことができるということである、と思われる。ただし、このような人だけが、単独で、いわばすべてのことについての一種の批判者なのであって、それ以外の人は、たとえ教養があるといっても、或る限られた自然についてだけそうなのだと思う。というのは、他の人でも、部分的にはそういう人と同じように批判できることもありうるから。」

(3) この箇所は、ドイツ語版では次のようになっている。

「これに関連してアリストテレスが専門の自然研究者 (dem Naturforscher vom Fach) と単に自然科学的な教養のある人 (dem bloß naturwissenschaftlich Gebildeten) との間に設けているのと同じ区別が (というのはそのことを問題にしているのである)、『政治学』のある箇所で、医者と „医学的な教養のある人“ との間でも、はっきりと確認されている。」

(4) イェーガーが引用しているアリストテレス『政治学』の該当箇所は、山本光雄訳の岩波文庫では次のような訳になっている (1961年)。

「しかし、医者と呼ばれる者には、普通の治療医と大家の医者と第三にその技術についてただ教育を受けたにすぎない者 (というのは殆ど凡ての技術についてもこのような人々がいて、これら教育を受けたにすぎない者にもその道の識者と同じように判断する権利を当てがっているから) とがある。」 (第三巻第十一章1282 a)

(5) ここはドイツ語版では次のようである。

「単なる個人的な教養を目的とする勉学 (eines Studiums) と、主題に職業的に取り組むこととの区別は、すでにあの時代の高貴なアテーナイ市民たちに出てきているのであって、彼らは確かにソフィストたちの講演に熱心に出席したのではあるが、しかし専門の学者にすらなるつもりはまったくなかった。」

(6) イェーガーが指摘しているプラトーン『プロタゴラス』の該当箇所は、藤沢令夫訳の岩波文庫 (『プロタゴラス—ソフィストたち—』) では次のようである (1988年)。

「そこでもし誰かが、さらにこう君にたずねたとしたら? 『それでは、君自身は何になるうとするつもりで、プロタゴラスのところへ行くのか』」

すると彼は、顔をあからめて答えた——すでに空もいくらか白みかけていたので、彼の様子がよくわかったのだ。

「先のいろいろな例にならうとすれば、明らかに、ソフィストになるためということになるでしょうね」

「だが、君としては、神々に誓って、自分がギリシア人たちの前にソフィストとして現われることに、気がひけはしないだろうか」

「ほんとうのところそうなのです、ソクラテス。——心に思うことをそのまま打ち明けなければならないとすれば」

「しかし、ヒポクラテス、おそらく君は、君がプロタゴラスから学ぼうとしているものが、そういった性質のものと考えているわけではないのではなからうか。むしろそれは読み書きの先生や竖琴の先生や、体育の先生から学んだのと同じような性質のものなのだろう？ つまり君は、そういったもののひとつひとつを、自分が本職の師匠（a professional, δημιουργός）になる目的で、専門的技術として学んだのではなく、一個の素人（private, ιδιώτην）としての自由人が学ぶにふさわしいものとして、一般的教養（education, παιδεία）のために学んだわけなのだ」

「たしかにおっしゃるとおり、プロタゴラスから学ぼうとするのは、むしろそういった性質のものであるように思われます」

（三312 A～B：挿入の英語、ギリシア語はローブクラシカルライブラリーに拠る）

- (7) イェーガーが指摘しているクセノフォンの『ソクラテスの思い出』の該当箇所は、佐々木理訳の岩波文庫では次のような訳になっている（1953年、第四巻二10）。

「ところで、エウテュデーモス、君はなんの達人になろうと思って書物を集めるんだね。」

エウテュデーモスがなんと答えたものかと考え込んで黙っていたので、ソクラテスがまた言った、

「医者ではないかな。医学書というものはなかなかたくさんあるものだから。」するとエウテュデーモスが言った、

「いいえ、決して。そうではありません。」

- (8) イェーガーの指摘の箇所は、ローブクラシカルライブラリーでは下記のとおり（第四巻2.1）。

I will now describe his method of dealing with those who thought they had received the best education and prided themselves on wisdom.（私は次に、最高の教育を受けてきたと思い、知恵を自慢している、そのような人々を彼がどう扱ったかを述べることにしよう。）

- (9) ドイツ語版では「それ（古代の医術文献）は非常に熱心に改宗運動をしようとしている。」となっている。ヒポクラテス全集において古代医術は、自ら獲得してきた経験的な自然科学（医学）の原理を主張し、思弁的な哲学方法による医術理論を熱心に批判している。なお、古代の医学と哲学との複雑な経緯（対立と相互浸透）についてはイェーガーの論述そのものを参照のこと。イェーガーは、古代ギリシアの「教養」史がこのような歴史的な緊張を孕む局面にあったことを指摘しているのであろう。

- (10) 「教養の発育にとって」は、ドイツ語版では「als Kulturpolitiker（教養についての策略家として）」となっている。

《原文注記》

1. *Paideia* II, 32. を見よ。

2. もっともよく知られている医術史（たとえば、SprengelとRosenbaumに拠るもの、

また Hecker に拠るもの) は、同じ過度な専門化の傾向のことを説明している、が、それらはギリシアの教養の内部における医学の位置を吟味はせず、しかもそれをその環境から切り離して扱っている。専門分野の (working in the field) 古代学者は、通常同じことをしてきている。(英語の読者は、この主題のよい案内を Charles Singer の小論, *Medicine, in the collection called The Legacy of Greece*, edited by R. W. Livingstone, Oxford, 1923. に見出すだろう。また W. Heidel, *Hippocratic Medicine*, New York, 1941. を見よ。)

3. ヘレニズム期の教養学説 (cultural system, Bildungssystem) における医術の位置については、F. Marx's prolegomena to his edition of Celsus, p. 8 f. を見よ。
4. たとえば、プラトンの『プロタゴラス』313 d, 『ゴルギアース』450 a と517 e, 『ソフィステース』226 e と228 e, 『ポリティコス (政治家)』289 a を、そしてとくに『ゴルギアース』464 b を見よ。より多くの例が与えられるであろう。ヘーロディコスの、医者という職業と体育の指導者との結合 (兼職) については、プラトンの『国家』406 a を見よ。
5. *Iliad* 11. 514.
6. p 16 f. を見よ。しかしながら、ギリシア医術がタレース⁽¹⁾に始まると見なされる時代があったのであり、それはケルスス (I, proem.6) の、普遍的な科学、あるいは哲学は元来あらゆる専門諸科学を含んでおり、あらゆる技術的発明の母である、という学説に従うものであった。しかしその学説は、ヘレニズム期の哲学史家によって創造された夢想的な虚構であった。何よりも、医術は完全に実践的な (practical) 技術であったのであり、そしてそれはイオーニア地方の理論家たちによって産み出された新しい自然哲学の影響を受けたのである。今なお残っているギリシア人の医術の文献が始まるのは、その影響の反応からである。
7. J. H. Breasted, *The Edwin Smith Surgical Papyrus, published in Facsimile and Hieroglyphic Transliteration, with Translation and Commentary* (2 vols., Chicago 1930); and A. Rey, *La Science Orientale avant les Grecs* (Paris 1930) p. 314 f. を見よ。あの段階でのエジプト医術が真に科学的であったかという問いについての文献としては、M. Meyerhof, *Ueber den Papyrus Edwin Smith, das älteste Chirurgiebuch der Welt, in Deutsche Zeitschrift für Chirurgie* vol. 231 (1931), pp. 645-690. を見よ。
8. *Paideia* I, p. 139 f. を参照せよ。
9. *Paideia* I, p. 155は、アナクシマンドロスの三つ組み的な学説 (triadic system, Triaden) を叙述している。7の数に関する理論は、ヒッポクラテース全集の「7について」の第5章⁽²⁾、「肉質について」の第12-13章⁽³⁾に現れており、またカリュストスのディオクレース⁽⁴⁾に、その考えの組織的な達成がある (frg. 177 Wellmann—a Latin excerpt from him preserved in Macrobius)。私の、ギリシア人の自然観における時間的な期間の理論と数の学説の重要性についての私の所見をもつ、「ペリパトス学派の、カリュストスのディオクレースの忘れられた断片」(*Abh. Berl. Akad.* 1938) の pp. 17-36にある、私が学者たちの注意を向けた、それのより完全なギリシア語に対応する版も参照のこと。
10. Solon, frg. 14. 6, 19. 9. を参照のこと。医術の文献における相応しいもの (the Suitable)

(ἀρμότιον) という考えについては、本書の42 pと私の *Diokles von Karystos, Die griechische Medizin und die Schule des Aristoteles* (Berlin 1938) p. 47 f. を参照のこと。

11. τιμωρίαとτιμωρεῖν⁽⁵⁾という言葉は、たとえば、ヒポクラテースの「急性病の撰生法について」15, 17, そして18. に見出される。ガレーノスは、これらのくだりを注釈しながら、また Erotian は τιμωρέουσα という見出し語の下に、それらが βοήθειαや βοηθεῖν⁽⁶⁾と同じことを意味すると説明している。このことは明らかに正しいのである、がしかし、同時に曖昧にも、その考えは、δίκη (ディケー；慣習、正義、裁定、加害者が被害者に当然支払うべき償い) τίσις (ティシス；償い応報、罰)、そして ἀμοιβή (アモイベー；交換、代償、替るもの) のような、自然哲学の古い概念のいくつかとつながっている。自然における原因は、報い (retribution) (『パイディア』 I, p. 157 f. を参照) のような法的 (legal) 過程の類推によって説明された。‘人は、不当に取り扱われていることには援助しようと (τιμωρεῖν) 努めなければならない’ とデーモクリトス⁽⁷⁾は言う。frg. 261. そして βοηθεῖν もまた、今日われわれが知るように、法律上の (juristic) 意味をもっている。
- 11 a. 「空気、水、場所について」の第12節で、健康の本質が、均等 (equality) (*isomoiria*) の状態、および一つの力による支配がないこと、として叙述されている。「古来の医学について」第14節も参照のこと。⁽⁸⁾
12. *Paideia* I, p. 303 f.
13. *Paideia* I, p. 386；トゥーキュディデースの、因果関係の医学的概念, ib. p. 389；彼の、歴史に対する準医学的な態度, ib. p. 396 f.
- 13 a. 「神聖病について」の第1節と21節。
14. L. エーデルシュタインは、on p. 117 f. of his *Περὶ ἀέρον und die Sammlung der hippokratischen Schriften* (Berlin 1931), プラトーンとアリストテレスはヒポクラテースを絶対的な権威者とは、ガレーノスの時代にそうであったほどには、見なしていなかった、と指摘している。しかしもし、プラトーン (『プロタゴラス』 311 b-c, 『パイドロス』 270 c) とアリストテレス (『政治学』 7.4. 1326a15) の有名なくだりはヒポクラテースへの深い尊敬の念を表明しているが彼を他の医者よりも少しも高く評価しているわけではない、ということを実証するという、彼の巧みな、しかし相当に無理な試みであったとしたならば、彼は有らぬ方向に向かってやりすぎたように私には思える。プラトーンもアリストテレスも、彼を代表的な医者、つまり医師の具現と考えていたことは、まったく疑う余地がない。
15. 全集のなかのいずれの作品が、ヒポクラテースの仲間に属したはずか、また学派の第一世代に属する人によって書かれたものか、を特定しようとする最新の系統だった試みは、K. Deichgräber's *Die Epidemien und das Corpus Hippocraticum* (*Abh. Berl. Akad.* 1933)。著者は、年代が特定され得る *Visits* (des *Epidemienwerkes* 流行病の著作)⁽⁹⁾のくだりに関する自らの研究を基礎にしているが、しかし彼は、何か特定の論文をヒポクラテース自身のものと思いついて特定することはしていない。この接近方法は、注意深くなされるならば、相対的に確かな成果を上げるだろう。今日もっとも必要とされることは、現存するヒポクラテースの作品の、文体と知的形式

(intellectual form, geistigen Form) の分析と説明なのであるが、そのようなことを提供しようとする試みは今までのところほとんどなされていない。

16. 科学的、哲学的学派のなかで、教えることと本を著すことは、同時に多くの者が共にする仕事であったのであり、このことについては私の *Studien zur Entstehungsgeschichte der Metaphysik des Aristoteles* (Berlin 1912) p. 141 f., と H. Alline, *Histoire du texte de Platon* (Paris 1915) p. 36 f. を参照のこと。われわれは、ヒポクラテース全集が forged (偽造された) 著作を含んでいると考えてはならないのであって、そういうものには、欺こうとする故意の意図で著名な著者名が加えられてきたものである—M. Wellmann の主張にもかかわらず、in *Hermes* 61.332 ; note 19. を参照。
17. *Corpus Medicorum Graecorum* (=CMG) I 1, 4. の中の ‘誓い’ を参照のこと。
18. Aristotle, *Hist. An.* 3.3.512 b 12-513 a 7 ; cf. Hipp. *On the nature of man* 11. あの章がアリストテレスによってなされたポリュボスからの引用と一致するという事実は、大多数の現代の学者たちを、ヒポクラテースの論文「人間の自然性について」の全体をポリュボスのものとするように導いてきた。古代のヒポクラテースの研究者たちは、この問題について見解が割れていた。ガレーノスは、この論文 (CMG 5.9.1), p. 7f., に関する彼の注釈のなかで、あの章の 1 から 8 まではヒポクラテース自身に拠るもの、と述べており、彼の理由は、そこで出されている四体液の理論 (the theory of the four humours, die Viersäftelehre (Humoralpathologie)) はヒポクラテース自らの著述の特徴だというのである。しかし彼は、論文の残りの部分を、ポリュボスのようにヒポクラテースと親密に関わっていた誰かに帰することを拒んでいる。サビーヌス Sabinus や大部分の古代の注釈家は、ポリュボスがその著者であったと考えている。(Galen, loc. Cit. 87. を参照のこと)
19. 「急性病の撰生法について 1」を参照のこと。著者は、クニドス学説の新しい改訂したものに言及している (Κνίδια γινῶμαι)。彼の実際の言葉は οἱ ὑστερον διασχευάσαντες であり、これは、*Visits* のように、その著作が一人の人間によってではなく、学派によって生み出されたことを意味している。⁽¹⁰⁾
20. J. Ilberg, *Die Aerzteschule von Knidos* (Ber. Sächs. Akad. 1924) を参照のこと；また最近の、L. Edelstein, on p. 154 of the work quoted in note 14 を参照のこと (彼は、ヒポクラテース全集の中の ‘クニドス’ の著作は、それまで信じられてきたよりはるかに少ない、ということを示明しようとしている)。また M. Wellmann, *Die Fragmente der sikelischen Aerzte* (Berlin 1902), を参照のこと。彼は、ディオクレースもまたシケリアー学派に属するという誤りを犯している；彼に対しては私自身の *Diokles von Karystos* (Berlin 1938) を参照のこと。
21. ἰδιώτης (‘layman’) に関しては「健康時の撰生法について 1」、「疾病について 1-33, 45,」と「食餌法について 3.68,」を参照のこと。Δημότης と δημιουργός は「体内風気について 1」「古い医術について 1-2」で対照されている。Ἰδιώτης と δημότης は「古い医術について 2」と「急性病の撰生法について 6」においては同義語である。χειρωναξ は同じ著作の chap. 8 に現れている。アイスキュロスは *Prom.* 45 で、鍛造術を χειρωναξία と呼んでいる。⁽¹¹⁾

22. CMG 1.1.8.
23. われわれは、修辭的散文で書かれた一般的主題についての医学講演者 (medical lecturers, iatrosophistische 医学ソフィスト的) の講演 (「術について」「体内風気について」のような) と⁽¹²⁾、簡素に事実だけを述べる様式で書かれた、しかしやはり一般公衆に向けられた著作 (「古い医術について」「神聖病について」「人間の自然性について」のような) とを区別しなければならない。四つの書物の「食餌法について」の論文は、同様に一冊の著作物 (a literary work, ein literarisches Werk) である。そのような本の目的は、素人大衆に教授することと、その著者自身を宣伝することの両方であったが、こうしたことは、医術専門職が国家からまったく公認を受けていなかったギリシアにおいては必要だったのである。「古い医術について 1, 12」「術について 1」「急性病の撰生法について 8」を参照のこと。
- 23 a. Plato, *Laws* 857-d : ὄνχ' ἰατρύεις τὸν νοσοῦντα, ἀλλὰ σχεδὸν παιδεύεις . Cf. *Laws* 720 c-d, そこでプラトーンはその二つの典型について同様の描写をしている。
24. 「古い医術について 2」; 「疾病について 1」の中別の例は p. 32を参照のこと。
25. Plato, *Symp.* 186 a-188 e.
26. Xen. *Mem.* 4.2.8-10
27. Thuc. 2.48.3.
28. Arist. *Part. An.* 1.1.639 a 1.
29. Arist. *Pol.* 3. 11.1282 a 1-7
30. *Paideia* 1, p. 316 f. を参照のこと。
31. Plato, *Prot.* 312 a, 315 a.
32. Xen. *Mem.* 4.2.10.
33. Xen. *Mem.* 4.2.1 : Τοῖς δε νομίζουσι παιδείας τε τῆς ἀρίστης τετυχηκέναι καὶ μέγα φρονοῦσιν ἐπὶ σοφία ὡς προσεφέρετο, νῦν διηγῆσομαι. クセノフォンはエウテュデーモスを、新しい、より高い種類の教養 (culture, Bildung) を獲得しようとする、その当時の努力を代表するものと思い描いているのであるが、その本質はまだ明らかではなかった。もちろんわれわれは、そういう教養 (culture) とソークラテース自身のパイデイヤーとは区別しなければならない。
34. Arist. *Pol.* 8.2.1337 b 15 : Ἔστι δὲ καὶ τῶν ἐλευθερίων ἐπιστημῶν μέχρι μὲν τινὸς ἐνίων μετέχειν οὐκ ἀνελεύθερον, τό δὲ προσεδρευεῖν λίαν πρὸς ἀχρίβειαν ἐνοχον ταῖς εἰρημεναῖς βλαβαῖς. 彼が1337 b 8で 'banausic work (実用本位の仕事)' の影響について述べていることを参照のこと。⁽¹³⁾

<注記と考察>

- (1) タレース：前636/624年頃～前546年頃。ギリシア最初の哲学者で、イオーニアのミーレートス出身。「ギリシア七賢人の1人。オリエント先進諸国を旅して幾何学や天文学などの自然科学を学び、それらをギリシア世界に導入した。」とされる。また「イオーニアの自然哲学派＝ミーレートス学派の祖として、その偉業はアナクシマンドロスやアナクシメネスらに継承された。」という。(松原著)
- (2) 該当箇所は、次のように訳されている。

「人間の自然性にもつぎの七つの時期がある。つまり年齢には、幼児・子供・少年・青年・成年・熟年・老年の呼び名がある。幼児は歯の抜けかわる七才まで。子供は精液を漏らす一四才、つまり七の二倍の年まで。少年は髭がはえる二一才、つまり七の三倍の年で、体はこの年まで成長する。青年は三五才、七の五倍の年まで。成年は四九才、つまり七の七倍の年まで。熟年は六三才、つまり七の九倍の年まで。そして老年は一四の七倍となる。」(『ヒポクラテス全集 第2巻』)

- (3) 該当箇所は、次のように訳されている(『ヒポクラテス全集 第2巻』からの抜粋)。

「最初の頃に摂っていた栄養分から生じたこの歯が抜け落ちるのは七年たってからである。人によっては、それよりも早く抜け落ちることもあり、歯が不良な栄養分から生じたようなときはそうである。しかし、大多数の人の場合は七年たってからである。」(12)

「体が成長するのは体の形ができ上がってからである。体の形ができくるのは主に七歳から一四歳までで、この時期には母体内の栄養から生じた歯が抜け落ちたのち、主要な歯を含むすべての歯が生えそろう。一方、体の成長のほうは、人が青年となる三周期目の七年間が終わり、さらに四周期から五周期目の七年間に至るまでつづく。「知恵歯」と呼ばれる二本の歯が多くの人に生えるのは四周期目である。」(13)

- (4) 「カリュストスのディオクレース」については、松原著の「ピリスティオン」(前4世紀前期の南イタリア出身の医学者で、シケリアーの医学派の代表者)の叙述の中に、次のような記述がある(999p)。

「年少の同時代人でアテーナイにおいて活躍したディオクレース(カリュストスの人。前4世紀)は、彼の影響を受けて4元素説を採用し、コースのヒポクラテス派やアリストテレスの学説を折衷。また動物の子宮を解剖するかたわら、人間の胎児の生長を記述し、胎生学・産科学の進歩に寄与した。」

- (5) τιμωρία は「仇討ち、罰、救援」という意味がある。
(6) βοήθεια は「救助、救済策、治療」という意味がある。
(7) デモクリトス：前470/460年頃～前371/356年頃。ギリシアの哲学者で、「師のレウキッポスの原子論を継承発展させて、唯物論の哲学体系を完成した」と評されている。また、「博学で名高く、倫理学、自然哲学、数学、音楽、天文学、医学、農業、美術、神話学、歴史、文法、詩学、等々さまざまに分野にわたる浩瀚な著書(72作品)が彼に帰せられているが、その後、ソクラテースの流派に属する人々に無視されたため、今日ではおよそ300の断片しか残存していない(イオーニア方言で書かれた彼の作品は、キケローによると、散文の最高峰と見なされるべきものであったらしい)」という。また、「彼の原子論はレウキッポスのそれと区別しがたく、万物の始源アルケーを同質・不変不滅にして極微・無数の原子アトモン(分割されぬもの)に求め、虚空(空間)内を運動するこれらの離合集散によってあらゆるものが生成・消滅すると主張」したという。さらにまた、「銀河を多くの小さな星の集まりであると初めて考えた人」だという。(松原著)

- (8) 「空気、水、場所について」の該当する一文のみを抜粋すると次のようである。

「何一つ一方的に強引に支配するものとしてなくすべてが均等になっているとき

は、何よりもいちばんうまく成長し栽培もうまくいく。」（『ヒポクラテス全集 第1巻』）

「古来の医術について」の該当節には特定されるべき文章があるわけではないが、趣旨を確認するために短く引いておくと次のようである。

「というのも事実、苦いもの、塩辛いもの、甘いもの、酸っぱいもの、渋いもの、水っぽいもの、その他、種類と強度の点で千差万別のものが人体の中にはたくさんあるからである。さてこれらが互いに混ぜ合わされ和合するならば、決してそれだけで目立った働きは見せず、人を害することもない。しかし他方、これらのうちの何かが分離され、それだけの作用が目立つようになるとともに、人を害しもするのである。」（『ヒポクラテス全集 第1巻』）

- (9) 『流行病』全7巻が、『ヒポクラテス全集 第1巻』に訳出されている。『流行病』の第1巻、第2巻の訳者である大槻マミ太郎は概説文で、「ちなみに、『流行病』第1巻第3巻は、ともに紀元前五世紀末にはヒポクラテス自身の臨床記録として書き記されていたものと考えられよう。」と述べている。また第2巻の訳者である近藤均は概説文で、「第6巻と同様に、一個人のオリジナルな著作ではなく、基本的には、さまざまな文献からエッセンスを抜粋した雑録である。」と述べ、「成立年代を推定することは難しいが、今日に伝わる形にまとめられたのは少なくともアレクサンドリア時代（前三世紀以降）に入ってからと思われる。」と書いている。また近藤は4巻について、「…体裁は第1巻・第3巻によく似ているが、文体は明らかに異なっている。」と指摘している。また第5巻については訳者である今井正浩は、「なお本篇（および第7巻）の成立時期については、語法・文体、また扱われている事柄などの諸点から、おおよそ紀元前4世紀前半から中頃とみる見方が有力である。」と指摘している。第6巻については、訳者の近藤は、「本巻も、第2巻と同様に、明らかに一個人のオリジナルな著作ではなく、今日に伝わらないものも含むさまざまな文献からエッセンスを抜粋した雑録である。」と述べている。第7巻については、訳者の今井は、第5巻との類似性を指摘し、「この両篇を『流行病』全篇中もっとも古い時期に属する第1・3巻と比較すると、いくつかの相違に気づく。」とし、比較の概説をしている。

- (10) 「急性病の撰生法について」のイエーガーが指摘する該当箇所は、冒頭から『クニドスの教本』の批判になっているが、その中に、「…もっとも、個々の病気に対して処方すべき薬剤については、後になってその教本を手直した人たちが医療の向上にかなりの貢献をした。しかし撰生法については、彼ら昔の人々は何もたいしたことは記さず、大切なのにそのことを気にとめなかった。」という論述がある。（『ヒポクラテス全集 第1巻』）イエーガーは、このような世代を超えた改訂の状況に目を向けている。

- (11) 「健康時の撰生法について」の該当箇所では、『ヒポクラテス全集 第1巻』では、「一般の人の食餌方は…」と訳され、その「一般の人」の訳について、次のような訳者注記が付されている。

「ここでの *ιδιωτης*（原文では前後の関係から複数対格形の *τους ιδιωτας* で出ている）は「一般の人」と訳した。普通は「私人、個人、素人、教養のない人」という意味に用いられ、「公的な仕事または専門の職についている人」とはつき

り区別されることばである。現代では<英>idiot (大馬鹿者、白痴者)のように、「公的な教育を受けられない人」の意に用いている。」

「体内風気について」(*On breaths*)では「一般の人々に」の訳に対し、次のような訳者注記が付されている(『ヒポクラテス全集 第1巻』)。なお‘体内風気’とは、腸内にたまるガスで、腹部が膨張する状態(鼓脹)を引き起こす。

「原文では *τοισι μην ιδιωτησι* (医術に対して経験のない素人たち、つまり一般の人々に)。A写本では *δημοτησι* (一般の人々に)。…」

さらにまた「急性病の摂生法について」には、次のような注記がある(『ヒポクラテス全集 第1巻』)。

「以下、「一般の人々」と訳したのは *ιδιώτης* または *δημότης* である。前者については『健康時の摂生法について』冒頭の注参照。後者は、元来、「居住区(*δήμος* デーモス)を同じくする人々」というほどの意味であったが、両者はやがて全く同じ意味で用いられるようになった。」

同様に、*On affection* (「疾患について」)、*On diet* (「食餌法について」)にも、「一般の人々」「一般の人」ということばが出てくる(『ヒポクラテス全集 第2巻』)。

- (12)『ヒポクラテス全集 第1巻』における「術について」の訳者は概説で、「作者は、自らが医者であるよりも、医術の代弁者であろう。本文の最後の節にもあるように、医者は医術にはたけていても弁論にはたけていないから、弁論巧みなソフィストの非難に対しては能弁なソフィストの登場が必要だったのであろう。」と指摘している。

また同巻の「体内風気について」の訳者は概説で、「これは、およそ医術に実際たずさわっている者の弁論とは思えない。その点では、全集中のソフィスト的論述の『術について』と好一对をなしていると思う。ソフィストたちからみると、ヒポクラテス派の医者には、立派な施術者ではあっても無口で言論には全く不得手な人たちが多かった。だから弁論の巧みなソフィストが代弁者となったのであろう。」と指摘している。

- (13)イェーガーが1337 b 15と指摘している箇所は、山本光雄訳(『政治学』岩波文庫、362 p)では下記のとおりである。

「しかし自由人的ないろいろの知識でも、それらの二三のものは、それに或る程度まで与かるのは非自由人的ではないけれど、完成を求めて余りにもそれに身を入れることには上述の害が伴なう。」

イェーガーが1337 b 8と指摘している箇所は、その少し前部の b 4から後部の b 10まで含めて確認すると、山本訳では下記のとおりである(362 p)。

「ところで、有用なもの(*useful arts, χρησίμων*)のうち是非とも必要なものが子供たちに教えられなければならないということは不明ではない。が、しかし有用なもの全てをかという、仕事は自由人的な(*liberal, ἐλευθέρων*)ものと非自由人的な(*illiberal, ἀνελευθέρων*)ものとに区別せられているので、そうではなくて、それらのうちで、それに与かる者を賤しい者にするのしないようなものにだけ与かなければならないということは明らかである。そして卑しい仕事と考えなければならないのは、術(*an art, τέχνην*)にせよ学習(*a science, μάθησιν*)にせよ、自由人(*free men, ἐλευθέρων*)の身体なり魂なり知性なり

を徳の使用や実践に対して役立つものにしてしまうものが凡てそうである。」（挿入した英語、ギリシア語はローブクラシカルライブラリーに拠る。）

Received : May, 11, 2016

Accepted : June, 15, 2016